本山町埋蔵文化財調査報告書第７集

永　田　遺　跡

（高知県長岡郡本山町）

１９９５．３

本山町教育委員会

永　田　遺　跡

本山町埋蔵文化財調査報告書第７集

１９９５．３

本山町教育委員会

巻頭カラー１

序

私達の郷土本山町は早くより嶺北地域の中心地として栄え，有形無形の貴重な文化遺産や偉大なる先人の輩出で今日において教育と文化の町を誇りとしている。

その歴史を綴るかのように，松ノ木遺跡（縄文後期大規模集落群）の発掘等に続く永田遺跡は畿内文化との深い繋がりが実証され，正に四国の交流の拠点的な位置であったことを裏付けた。この地は，嶺北高校敷地造成工事中にも大量の土器が発掘されたところで，農耕，漁業にも適したこともあって発掘は注目がされていた。

国道439号線と一級河川吉野川に挟まる交通の要衝で利便，商業性を兼ね備え，嶺北高校校門新設工事，四国銀行本山支店移転工事が相次ぎ，緊急発掘となったものである。

調査は，四国銀行本山支店移転地1,000㎡で実施され，竪穴式住居二棟，貯蔵穴，弥生後期の土壙墓一基のほか大阪，徳島で製作した土器が大量にみつかり，この地が畿内と本県太平洋沿岸地域とをつなぐ拠点であったと思われる。

四国銀行の全面的協力と施行業者の理解，高知県教育委員会文化振興課の支援，出原恵三係長をはじめ埋蔵文化財に感心をもつ町内外の有志の御協力によって大きな成果をあげることができました。

特に最終段階をむかえての直径1.2m，深さ60㎝の貯蔵穴から完全な形での土器約20点がみつかったことは理想的な発掘体系と関係者の協力の賜だと感謝の気持ちでいっぱいであります。

この調査に御協力いただきました皆様に深く感謝申し上げますと共に，今後この報告書が考古学上貴重な参考資料として活用され，埋蔵文化財に対する人々の認識が深まるよう念じます。

平成７年３月７日

本山町教育委員会

教育長　和　田　聖　寛

例　言

1　本書は，本山町教育委員会が平成６年度に実施した四国銀行本山支店の店舗移転に伴う永田遺跡の緊急発掘調査報告書である。

2　永田遺跡は，高知県長岡郡本山町本山字永田に所在する。

3　発掘調査は，試掘調査を平成６年６月10日に行い，本調査を６月14日から６月24日まで実施した。試掘調査は900㎡を対象として行い，本調査は400㎡について行った。

4　調査体制は以下の通りである。

(1)　調査員

出原恵三（高知県文化財団埋蔵文化財センター　調査第３係長）

佐竹　寛（　　同　　主任調査員）

藤方正治（　　同　　調査員）

(2)　事務担当

右城　誠（本山町教育委員会　　主事）

5　本書の編集は，出原が行い，執筆については下記のように分担した。

第１章　調査に至る経過　（出原）

第２章　遺跡周辺の歴史的環境　（佐竹）

第３章　調査の成果

1　調査の方法と基本層序　（出原）

2　弥生・古墳時代の遺構と遺物

(1)　竪穴住居　（藤方）

(2)　土　　坑　（佐竹）

3　中世以降の遺構と遺物　（佐竹）

4　包含層出土の遺物　（出原）

第４章　考　　察　（出原）

観察表　（佐竹）

6　遺物整理・図面作成等の作業においては，埋蔵文化財センターの下記の方々の協力を得ることができた。記して感謝の意を表したい。

大原嘉子　　岡村真由紀　　山中美代子

7　現場での発掘作業は，地元本山町の方々の献身的な協力を得ることができた。記して感謝の意を表したい。

8　最後に，この発掘調査を遂行できたのは，四国銀行の埋蔵文化財に対する理解と協力，わけても本山支店長山本 亮 氏のきめ細かなご配慮の数々があったこと，並びに工事責任者関西土木株式会社が調査に際して種々便宜を図って下さったことに負うところが大きかったことを銘記し，感謝の意を表したい。

本 文 目 次

第Ⅰ章　調査に至る経過 …… 1

第Ⅱ章　遺跡周辺の歴史的環境 …… 2

第Ⅲ章　調査の成果 …… 4
1．調査の方法と基本層序 …… 4
(1)　調査の方法 …… 4
(2)　基本層序 …… 5
2．弥生・古墳時代の遺構と遺物 …… 9
(1)　竪穴住居 …… 9
(2)　土　　坑 …… 11
(3)　集中出土地点の土器 …… 17
3．中世以降の遺構と遺物 …… 22
(1)　土　　坑 …… 22
(2)　ピット出土の遺物 …… 24
(3)　包含層出土の遺物 …… 25

第Ⅳ章　考　　察 …… 29

図版目次

Fig. 1　永田遺跡の位置と周辺の遺跡分布図
Fig. 2　調査区位置図
Fig. 3　調査区及び基本層序位置図
Fig. 4　基本層序
Fig. 5　検出遺構全体図
Fig. 6　ST 1実測図及びセクション図
Fig. 7　ST 1出土遺物実測図
Fig. 8　ST 2出土遺物実測図
Fig. 9　ST 2遺物出土状況実測図，ST 2実測図及びセクション図
Fig. 10　SK 1～5・9・10実測図
Fig. 11　SK 2・3・11・13出土遺物実測図
Fig. 12　SK 11実測図及びセクション図
Fig. 13　SK 11出土遺物実測図
Fig. 14　SK 13・14実測図
Fig. 15　SK 32遺物出土状況実測図
Fig. 16　SK 32平面図及び断面図
Fig. 17　SK 32出土遺物実測図
Fig. 18　SK 32出土遺物実測図
Fig. 19　SK 32出土遺物実測図
Fig. 20　SK 33及び出土遺物実測図
Fig. 21　集中地点出土遺物実測図
Fig. 22　SK 20出土の石鏃実測図
Fig. 23　SK 8・12・17～20・23・30実測図
Fig. 24　SK 23・12出土遺物実測図
Fig. 25　ピット出土遺物実測図
Fig. 26　包含層出土遺物実測図
Fig. 27　包含層出土遺物実測図

写真図版目次

ＰＬ１：試掘調査（西から）・同（南から）
ＰＬ２：東区北壁セクション
ＰＬ３：東区西壁（Ｎ－Ｓ）セクション
ＰＬ４：SK 1セクション・同完掘状況
ＰＬ５：SK 3・SK 4完掘状況
ＰＬ６：SK 5半截状況・SK 9完掘状況
ＰＬ７：SK 11完掘状況（南から）・同（東から）
ＰＬ８：SK 11セクション
ＰＬ９：SK 17完掘状況・SK 18半截セクション
ＰＬ10：ST 1完掘状況・ST 2完掘状況
ＰＬ11：SK 32遺物出土状況（上層）・同上（中層）
ＰＬ12：SK 32遺物出土状況（中層）・SK 32完掘状況
ＰＬ13：SK 33検出状況・Ｐ13半截状況
ＰＬ14：調査区東半分完掘状況（北西から）・同上（南から）
ＰＬ15：調査区西半分完掘状況（南東から）・発掘調査状況
ＰＬ16：ST 2（5～8）・SK 32（67）・包含層（83・97）出土の遺物
ＰＬ17：ST 2（15）・SK 3（21）・SK 11（20）・SK 32（27～29）出土の遺物
ＰＬ18：SK 32出土の遺物
ＰＬ19：SK 32（47～50）・集中地点（70・71）出土の遺物
ＰＬ20：SK 32（52・63）・SK 13（95）・包含層（93）出土の遺物
ＰＬ21：石器・同裏面

第Ⅰ章　調査に至る経過

平成６年６月１日，本山町教育委員会より高知県教育委員会文化振興課に四国銀行本山支店の移転計画が具体化しつつあるとの連絡が入った。移転地である本山町本山字永田749，751-1は周知の遺跡とはなっていないが，移転地に北接して嶺北高校校庭遺跡が所在している。当遺跡は，昭和30年代に発見された弥生時代中期から古墳時代にかけての集落址であり，発見以来今日に至るまで同校校庭内のみを遺跡の範囲として登録してきたところである。しかし地形的な状況から見て，当遺跡は周辺に広がっていることが十分に考えられることから，文化財保護部局としては，少なくとも確認のための試掘調査が必要であるとの判断に立ち，本山町教育委員会及び高知県教育委員会は，四国銀行との協議に入った。四国銀行移転地が周知の遺跡として登録していなかったこと，工期の関係などから立会調査の実施を主張されたが調査の方法については，試掘調査の結果を待ち，その判断は文化財保護部局に一任してくれるようお願いし，一応の了承を得ることができた。

これを受けて本山町教育委員会は，県教育委員会の協力を得て６月10日に試掘調査を実施した。その結果，移転計画地900㎡のうち北側部分の約400㎡余りについては，弥生時代から中世にかけての遺物包含層が残っていることが明らかになり，ピット状の遺構も数個検出した。南側部分については，旧地形が下降していることもあって遺構等の存在はないものと判断した。したがって，本山町教育委員会と県教育委員会は，移転予定地内の遺物包含層及び遺構の存在が確認された北側部分の約400㎡については記録保存のための本格的な発掘調査が必要であるとの判断に立ち，その旨四国銀行に通知すると共に協議に入った。その結果四国銀行からは，埋蔵文化財の重要性に鑑み記録保存のための緊急発掘調査については，全面的な協力体制で臨むとの回答をえることができた。

本調査は，遺跡に支障のない南側の工事と併行して６月14日から開始する運びとなり，調査の実施については高知県文化財団埋蔵文化財センターが担当することとなった。

調査終了後の永田遺跡（四国銀行本山支店）

第Ⅱ章　遺跡周辺の歴史的環境

永田遺跡のある長岡郡本山町は，四国のほぼ中央部，高知県の最北部に位置し，近隣の５ヶ町村と共に嶺北地方と呼ばれており，最も遺跡の集中するところである。町のほとんどは山林で占められているが，町を南北に２分して蛇行する吉野川流域にあって唯一肥沃な河岸段丘を形成し，人々に生活と生産の場を提供している。この吉野川は四国最大の河川であり，下流域において徳島平野を潤している。近世以降は，四国山地で伐採した「御用材木」の搬出路として利用されたことからも窺えるように東からの文物流入の動脈としての機能を果たしてきている。また本山町は，瀬戸内と太平洋側を結ぶ中継地点でもあり，東西・南北からの情報のクロスする地点でもある。このような地理的環境が本山町の歴史と文化の形成に重要な役割を果たしている。

本山町の歴史は長徳寺遺跡の調査によって，縄文時代早期にまで遡ることが確認されており，以後縄文時代を通して連綿と人々[(1)]の生活のあとをたどることができる。当地域は，県下において西部の四万十川流域とともに，縄文時代遺跡の最も集中しているところである。長徳寺址からは縄文早期の蔦島式土器と，高知県では初出土の大形楕円形押型文土器である高山寺式土器が出土している。また，２個の石錘も出土しており，土佐の網漁業が縄文早期まで遡ることが明らかになった。松ノ木遺跡は，１～３次の発掘調査が実施され，多大な成果を挙げている。とりわけ，松ノ木式土器と命名された[(2)]縄文時代後期の土器は，今や全国的に著名な土器型式となり，松ノ木式土器文化の内容をめぐって当地域が俄に注目されつつある。このように当地域は，縄文時代の遺跡の希薄な中・東部にあっては最も充実した内容をもつ地域として重要な位置を占めている。

弥生時代は，中期末から遺跡が分布し始め，後期末～古墳時代初頭に至って爆発的な増加を見せる。北接する嶺北高校校庭遺跡から凹線文の壺・高坏と太型蛤刃石斧が出土しており，西方の銀杏の木遺跡からは，竪穴住居址状遺構，貯蔵穴などの遺構が検出されると共に，ヒビノキⅡ式土器[(3)]併行の銀杏ノ木式土器やこれに伴って打製石包丁が３点，石錘等が出土している。また，堀ノ尻遺跡は，弥生時代末から平安時代にかけて営まれた遺跡であり，８世紀末から９世紀[(4)]前半に属する須恵器が主体を占めている。なかでも注目すべき遺物として，緑釉の坏を挙げることができるが，これは当地域では初めての出土であり，今後，周辺部を含めた当遺跡の性格付けを考える上で重要な資料となるものである。また，先に挙げた松ノ木遺跡からは，弥生時代後期終末から古墳時代初頭の竪穴住居址が10棟発見[(5)]されており，その中からは岡山や徳島で作られた土器が出土しているが，当時の地域間交流の在り方を如実に示すものとして注目されている。[(6)]

註

(1)　岡本健児他　『長徳寺址発掘調査報告書』　高知県長岡郡本山町教育委員会　1977年
(2)　出原恵三・前田光雄　『松ノ木遺跡　Ⅰ』　高知県長岡郡本山町教育委員会　1992年
(3)　岡本健児　「嶺北高校校庭出土の遺物群」　前謁註(1)
(4)　岡本健児　『銀杏の木遺跡の発掘』　高知県長岡郡本山町教育委員会　1984年
(5)　出原恵三　『堀ノ尻遺跡』　高知県長岡郡本山町教育委員会　1993年
(6)　出原恵三　『松ノ木遺跡　Ⅱ』　高知県長岡郡本山町教育委員会　1992年

No	遺跡名	時代	No	遺跡名	時代	No	遺跡名	時代
1	永田遺跡	弥生～中世	9	下津野遺跡	縄文･弥生･中世	17	沖田遺跡	縄文
2	長徳寺遺跡	縄文～中世	10	上奈路遺跡	縄文・中世	18	樋ノ口遺跡	縄文・弥生
3	東久保遺跡	弥生	11	北山瀬ノ上遺跡	中広銅矛出土	19	高笹遺跡	弥生
4	銀杏の木遺跡	弥生～中世	12	松ノ木遺跡	縄文～古墳	20	静岡遺跡	縄文
5	寺家遺跡	中世	13	八反坪遺跡	縄文	21	大畑遺跡(岡遺跡)	弥生
6	東畑遺跡	弥生・中世	14	下田遺跡	弥生	22	鳥井遺跡	縄文
7	天神前遺跡	弥生	15	玉屋敷遺跡	縄文			
8	堀ノ尻遺跡	弥生～中世	16	田井古屋遺跡	弥生			

Fig. 1　永田遺跡の位置と周辺の遺跡

第Ⅲ章　調査の成果

1．調査の方法と基本層序

(1)　調査の方法

すでに前項でも触れたように，工事予定地の900㎡に２×２ｍ～２×６ｍの試掘グリットを６個所設定した結果，ほぼ北半分から弥生～中世の遺物を含む包含層や一部遺構の存在が認められた。南側半分については遺物がほとんど認められず旧地形が南側に向かって下降していることが明らかとなった。従って本調査は北側400㎡について実施することとなった。

廃土置き場を確保するために調査区を東西に二分し，東側から調査にかかることとした。遺物の取り上げ，遺構実測は磁北にあわせた任意座表を組み，４ｍ毎に杭を打ち南北方向に北から１・２・３・・・，東西方向に西からＡ・Ｂ・Ｃ・・・と杭No.をふり，北西隅の杭No.を４ｍ方画の名称とした。現表土及び客土等の堆積が厚かったために遺物包含層の上層までは重機を使って掘削し，

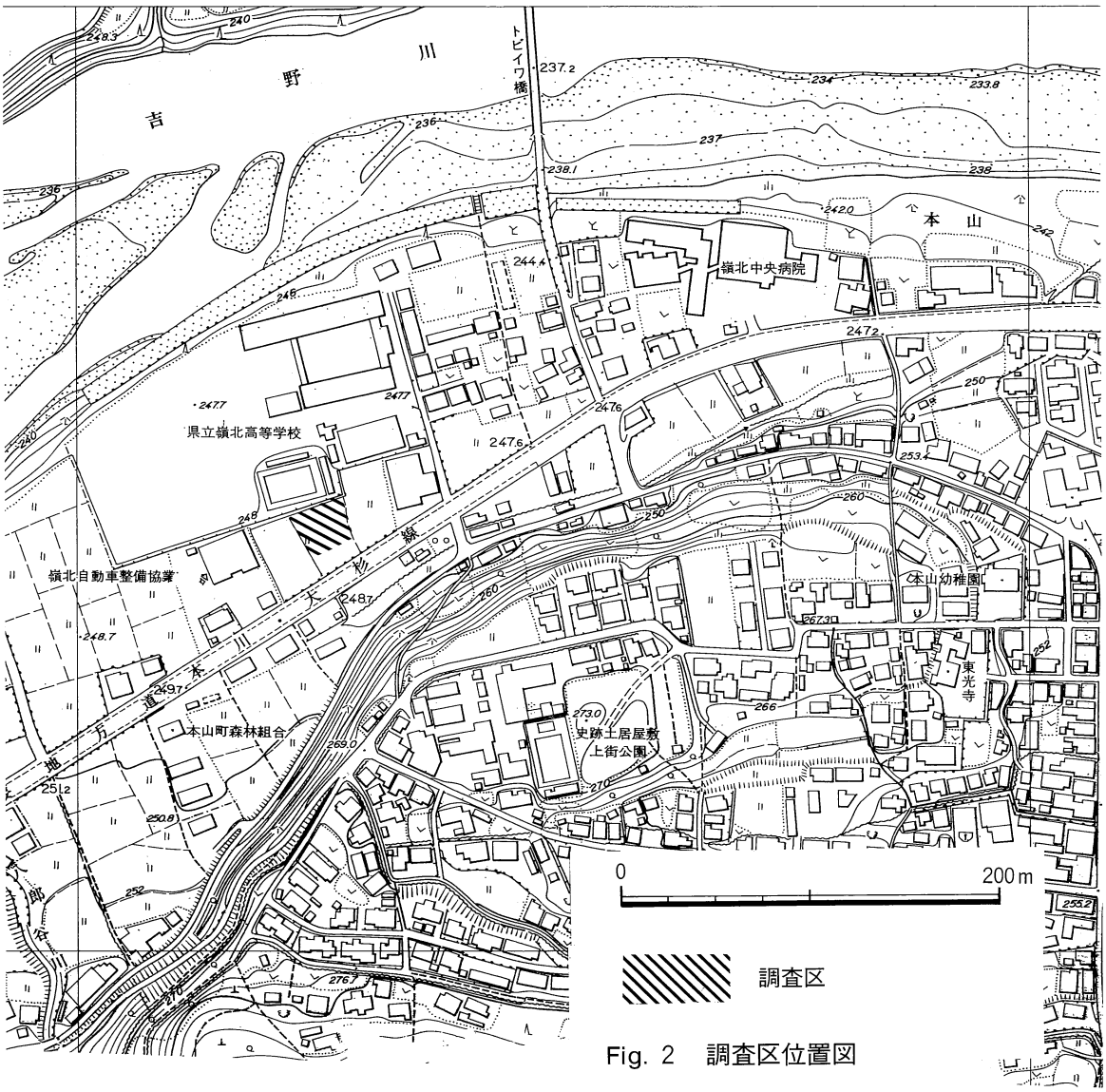


Fig. 2　調査区位置図

それより下層は人力で掘り下げた。遺構の平面及びセクションの実測は20分の１を原則とし，必要に応じて10分の１実測を行った。

(2) 基本層序

Ⅶ層：黄色シルト層で地山を形成する。この地域の基盤層であり当調査区では弥生時代の遺構検出面である。南北セクションの中央部よりやや南によった地点で段状になっている。

Ⅵ層：明褐色粘質土層で，層厚は８～30㎝を測る。弥生・古墳・中世の遺物包含層である。

Ⅴ層：暗灰褐色粘質土層で，上部にアカホヤ（音地）の二次堆積土を僅かに含んでいる。南北セクションの一部にのみ存在している。

Ⅳ層：灰褐色粘質土層で層厚は12～30㎝を測る。旧耕作土の可能性がある。南北セクションでしか見られないが，南部は近代攪乱（ａ層）に切られている。

Ⅲ′層：暗褐色粘質土層で層厚は15～20㎝を測る。旧耕作土で南北セクションの南部にのみ堆積している。

Ⅲ層：褐色粘質土層で層厚は10～30㎝を測る。旧耕作土である。

Ⅱ′層：黄灰色粘質土層で層厚は４～６㎝を測る。Ⅱ層の床土である。

Ⅱ層：黒灰色粘質土層で層厚は15～20㎝を測る。南北セクションの南寄り３分の１の地点では現耕作土となっている。

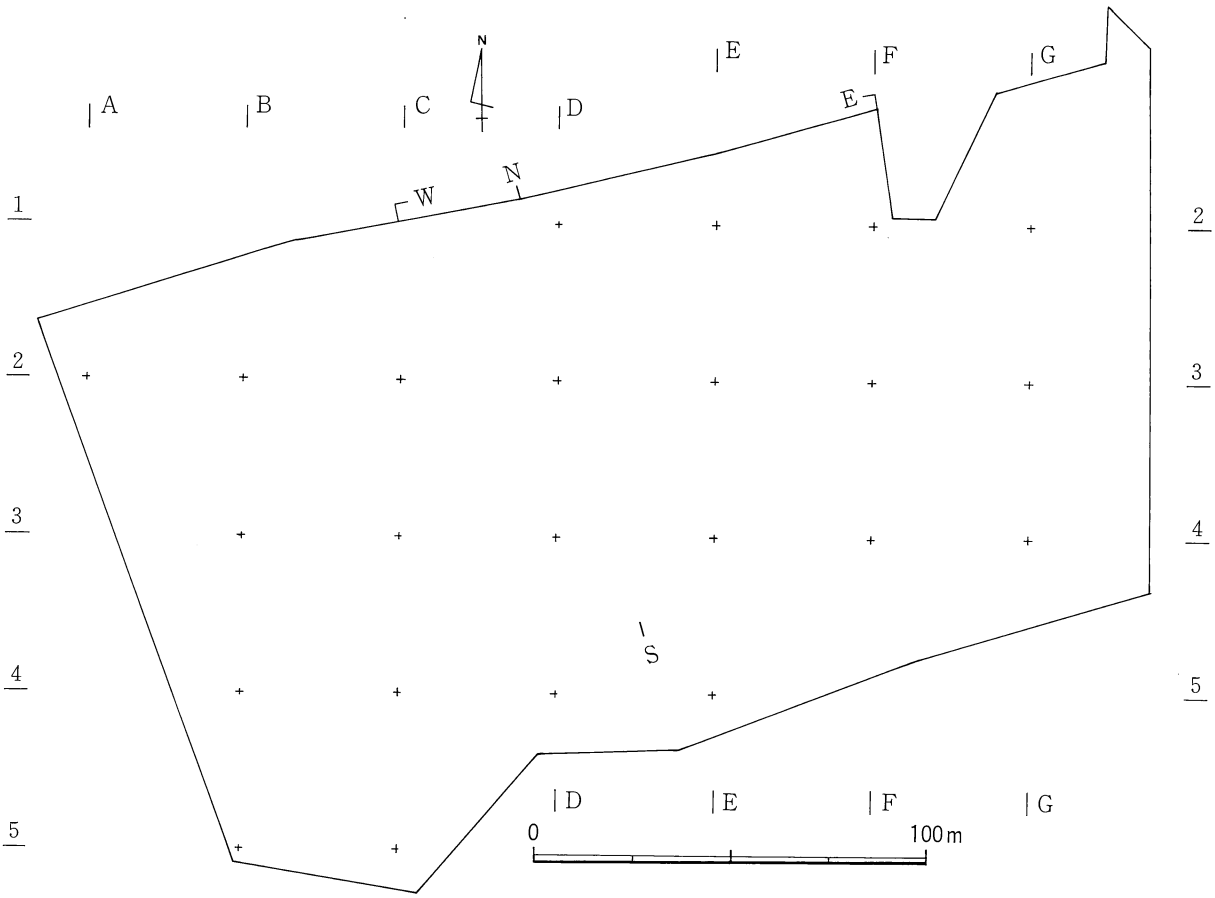
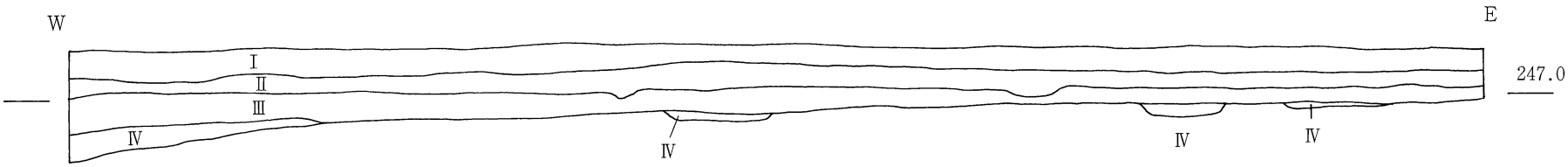
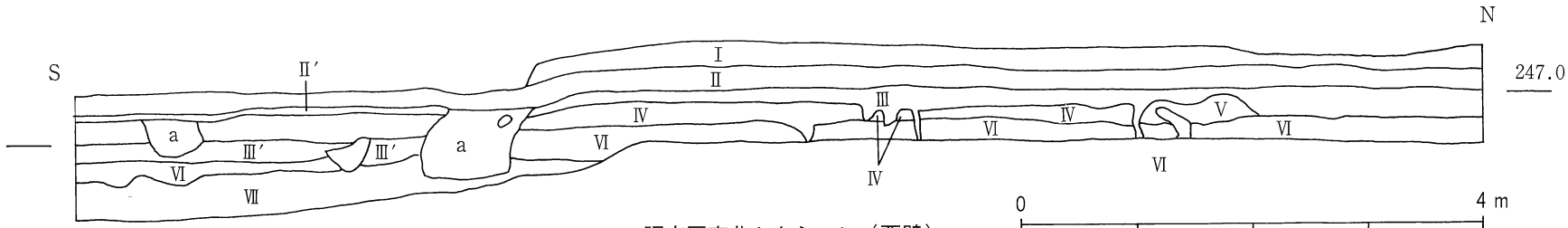


Fig. 3　調査区及び基本層序位置図



調査区北壁セクション



調査区南北セクション（西壁）

Ⅰ層：耕作土
Ⅱ層：　〃
Ⅱ′層：黄灰色粘質土（床土）
Ⅲ層：褐色粘性土（上部に茶色の班点を多く含む。旧耕作土）
Ⅲ′層：暗褐色粘性土
Ⅳ層：灰褐色粘性土
Ⅴ層：暗灰褐色粘性土（Ⅳ層を母体として上部に音地をブロックで含む。）
Ⅵ層：明褐色土（弥生・古墳時代の包含層）
Ⅶ層：黄色シルト（地山）
a　：近代攪乱層

Fig. 4　基本層序

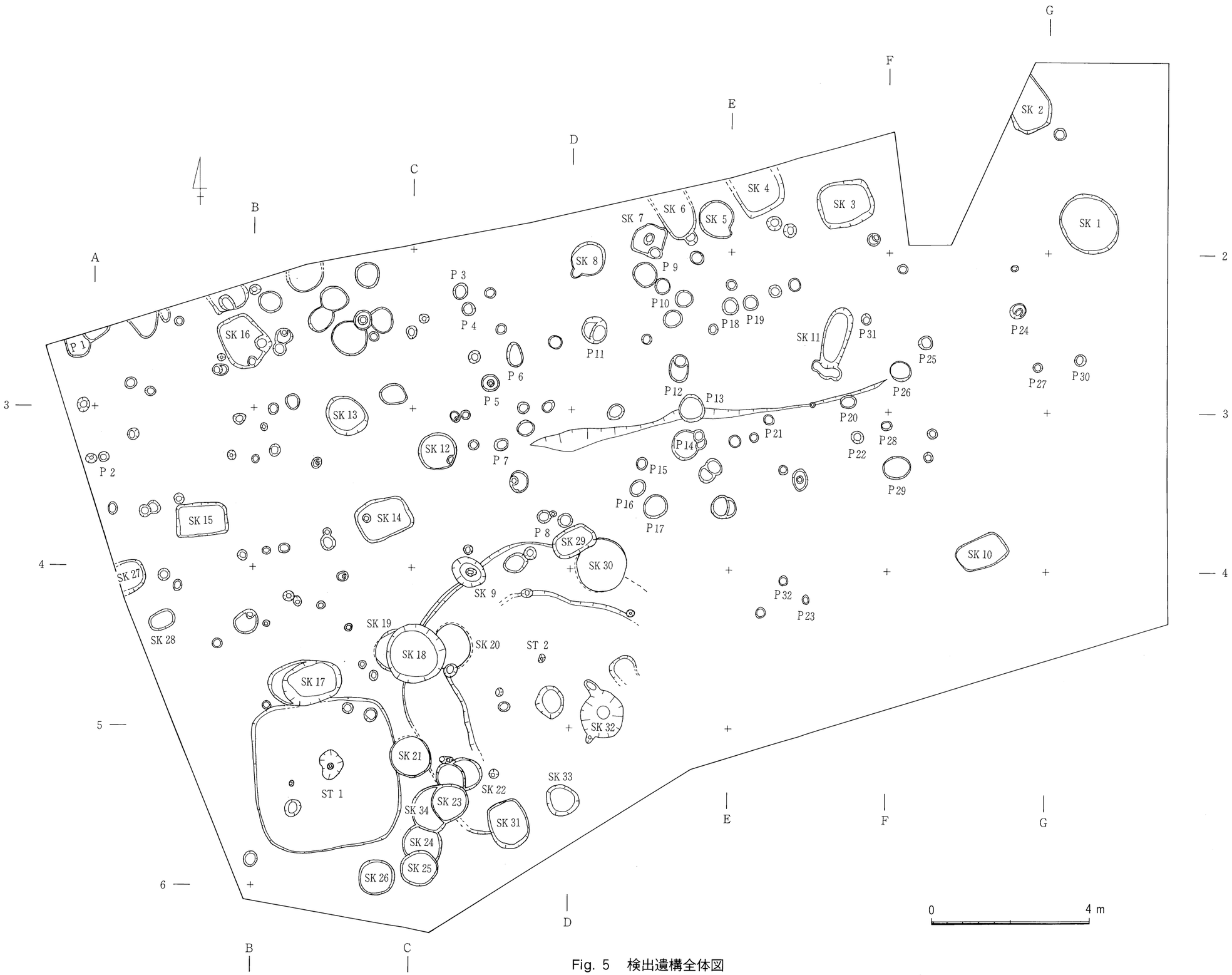


Fig. 5　検出遺構全体図

Ⅰ層：現耕作土で層厚25～30cmを測る。

南北セクションでは，地山面（Ⅶ層）が南に向かって低くなっていることが読み取れる。その変化点は，南寄りの段部であり各層準共にこの変化に対応している。また東に向かってもⅦ層は下降の傾向を示している。

2．弥生・古墳時代の遺構と遺物

(1) 竪穴住居

ST 1（Fig. 6・7）

調査区の西南部で検出された竪穴住居跡であり，埋土は主に茶色粘土である。北部と東部に於いて各々中世等の土坑 SK 17，21によって切られる。南北3 m80cm×東西3 m60cmの隅丸方形を呈し，検出面からの深さは12cm～22cmを測る。住居跡の中央部に88cm×70cmの不整楕円形状に炭化物と焼土が集中して存在し，この傍らには台石と考えられる河原石が置かれていた。住居に伴う柱穴は4個検出されたが，上屋構造に伴うかは不明確である。

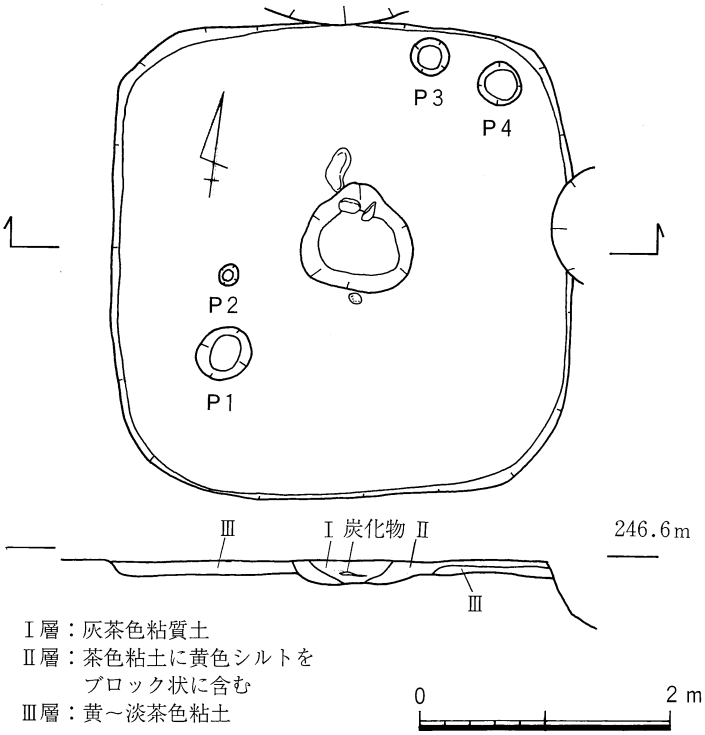


Fig. 6　ST 1 実測図及びセクション図

出土遺物は甕と鉢のものであり，細片を主として80点余りであった。図示できるものは1～3（Fig. 7）の3点である。1は鉢である。手捏ね成形の小型品で底部は丸底である。2は中央焼土集中部で出土した結晶片岩製の石錘であり，3は緑色片岩製の叩石である。細片中には搬入品と考えられる甕の破片も含まれており，土器以外にはサヌカイトや結晶片岩等の剥離片が見られた。

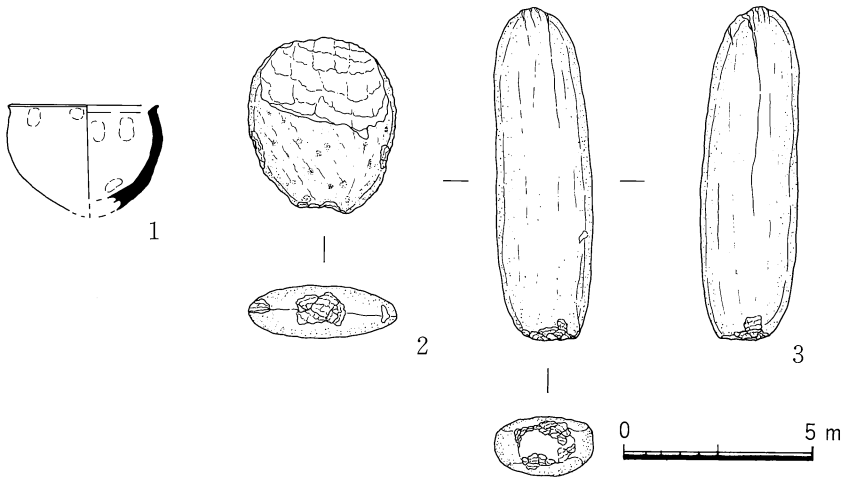


Fig. 7　ST 1 出土遺物実測図

ST 1の機能時期は僅少な出土遺物から判断し難いが古墳時代初頭と考えられる。

ST 2（Fig. 8・9）

調査区の中央部南で検出された竪穴住居跡であり，埋土は主に淡茶褐色土であるが上位では遺物を多く含む暗褐色土層が存在した。東北部でSK 29，30，西部でSK 18，20，西南部でSK 21，22，23，31の中世等の土坑群によって切られている。又，弥生後期の土坑SK 32及び縄文時代の可能性のある土坑SK 9を切っている。東南部は後世の削平を受けており，平面形態は不明確であるが，残存規模6.8m×6.4m隅丸方形又は多角形を成すと考えられる。残存部分に於いては住居壁際から幅1.0m～1.2m，住居床面からの高さ約12cmの版築によるベット部が存在する。ベット部を除去すると壁に沿って，幅8cm，深さ3cmの小溝が検出された。ST 2は2時期にわたるものと考えられる。住居跡の中央部には97cm×81cmの楕円形を呈する中央ピットが存在する。このピットは床面より深さ17cmを測るが，外周には土手状の盛り土部分が存在しており，埋土上部には炭化物と焼土が多く含まれていた。又，この北西方向約1mには台石と考えられる断面楕円形の河原石が床面上に存在した。住居跡の床面を中心に柱穴を12個検出しているが，P 3，11はベット除去後の検出であり，ベット状遺構構築以前に対応するピットである。ST 2の床面上及びベット上からは炭化物や焼土の出土が著しく，特に炭化木材で残存が良い

P no.	計測値（cm）	深さ（cm）	平面形態
1	直径 49	46	円形
2	19×16	4	楕円形
3	直径 35	4	円形
4	42×39	7	楕円形

表1．ST 1 ピット計測表

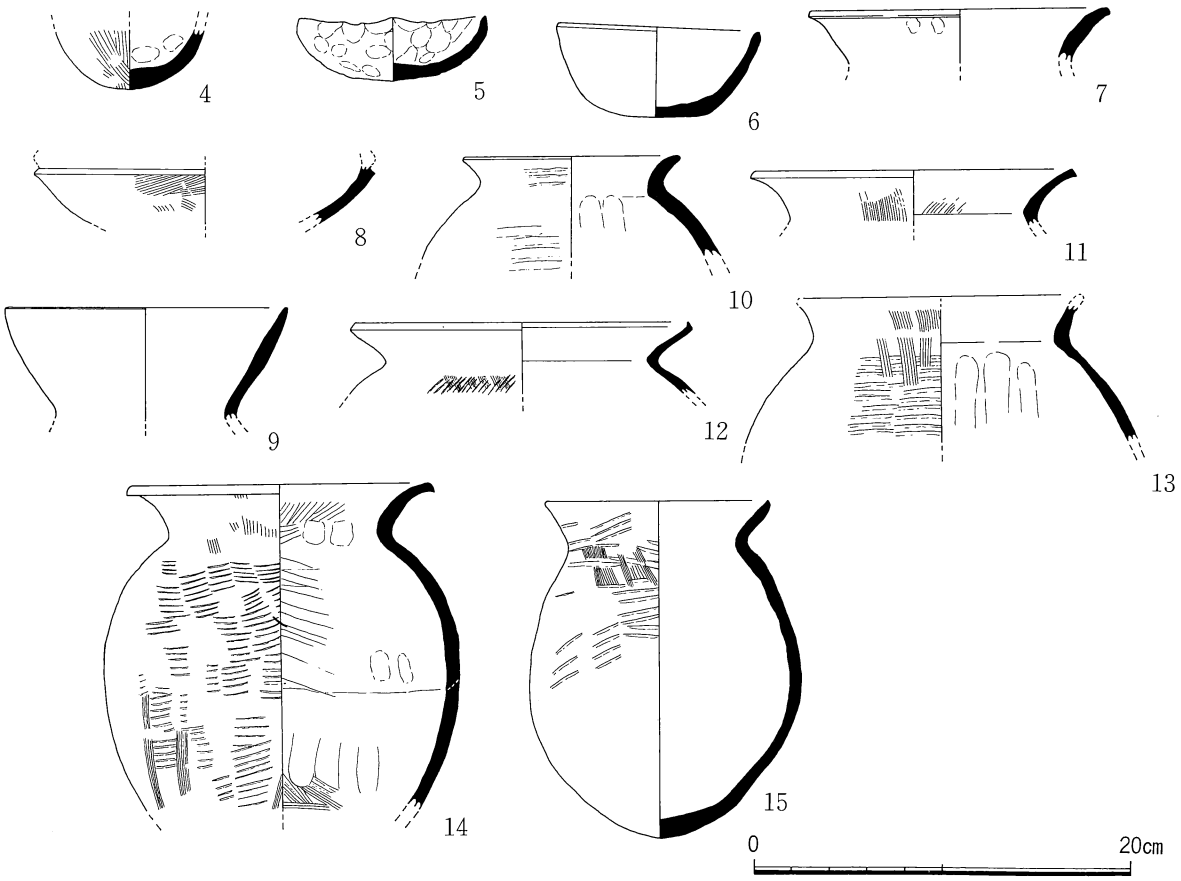


Fig. 8　ST 2出土遺物実測図

ものに於いては住居中心部への指向性が見られる。又，これらの中には角材であったと考えられるものが存在することから垂木等上屋を構成するものであった可能性が高い。

これらのことからST 2は焼却か火災に遭った住居跡と考えられる。

出土遺物は土器破片を主として450点余りであるが，図示できるものは4～15（Fig. 8）の12点であった。4～6は鉢である。4は底部丸底，5は皿状を呈す手捏ねのものであり，6は椀状を呈し，底部は平底を成す。7，10，11，13～15は甕である。12は搬入品であり，河内産のものと考えられる。7，11，13～15はハケ又は叩きのちハケの調整を施すものであるが，10では叩き調整のみを施しており，15は底部丸底である。8，9は壺である。8はP 6出土のものであり，瀬戸内系の赤彩された長顎壺の胴部片である。弥生時代後期初頭のものであることから混入であろう。これらの土器の内13，14が床面から，5，12，15がベット上からの出土であり，6はその部位を床面とベット上から得ている。

P no.	計測値（cm）	深さ（cm）	平面形態
1	44×37	56	楕円形
2	直径 39	22	円形
3	33×26	30	楕円形
4	79×(58)	9	〃
5	(49)×23	37	〃
6	(28)×21	55	〃
7	直径 33	13	円形
8	28×23	21	楕円形
9	39×21	22	〃
10	26×21	46	〃
11	直径 22	56	円形
12	直径 28	34	〃

表2．ST 2ピット計測表
※（ ）内の数値は残存値。

ST 2はその機能を古墳時代初頭に於いて終了したと考えられる。

(2) 土　坑

SK 1（Fig. 10）

SK 1は，調査区の東北隅にある。平面形は楕円形を呈し，長軸158cm，短軸140cm，深さ17～19cmを測る。壁は急傾斜で立ちあがり，床面は平坦な面をなす。埋土は濃茶色粘質土の単純一層で，埋土中より弥生土器及び古式土師器の細片が30数点出土しているが，図示できるものはない。古墳時代前期に属する。

SK 2（Fig. 10・11）

SK 2は，調査区の東北隅にあり，半分以上が調査区外に出るが，隅丸方形を呈するものと考えられる。断面は舟底状をなす。壁は西側は緩やか，東側は急傾斜で立ちあがり，床面は中央部がやや凹む。埋土は濃茶色粘質土の単純一層で，遺物は古式土師器の細片が60点余りと圧倒的に多くその中にはST 2で示したように，明らかに河内からの搬入品であるものも含まれている。また，縄文土器片や弥生後期末の二重口縁壺（16）も出土している。須恵器の細片から6世紀頃の遺構と考えられる。

SK 3（Fig. 10・11）

SK 3は，調査区の東北部にある。平面形は隅丸長方形を呈し，長軸140cm，短軸112cm，深さ25～29cmを測る。壁は急傾斜で立ちあがり，床面は西側に向けて低く傾斜している。埋土は濃茶色粘質土の単純一層で，遺物は埋土中より，弥生終末と古式土師器の細片が350点，床からも甕の大片(21)が出土している。

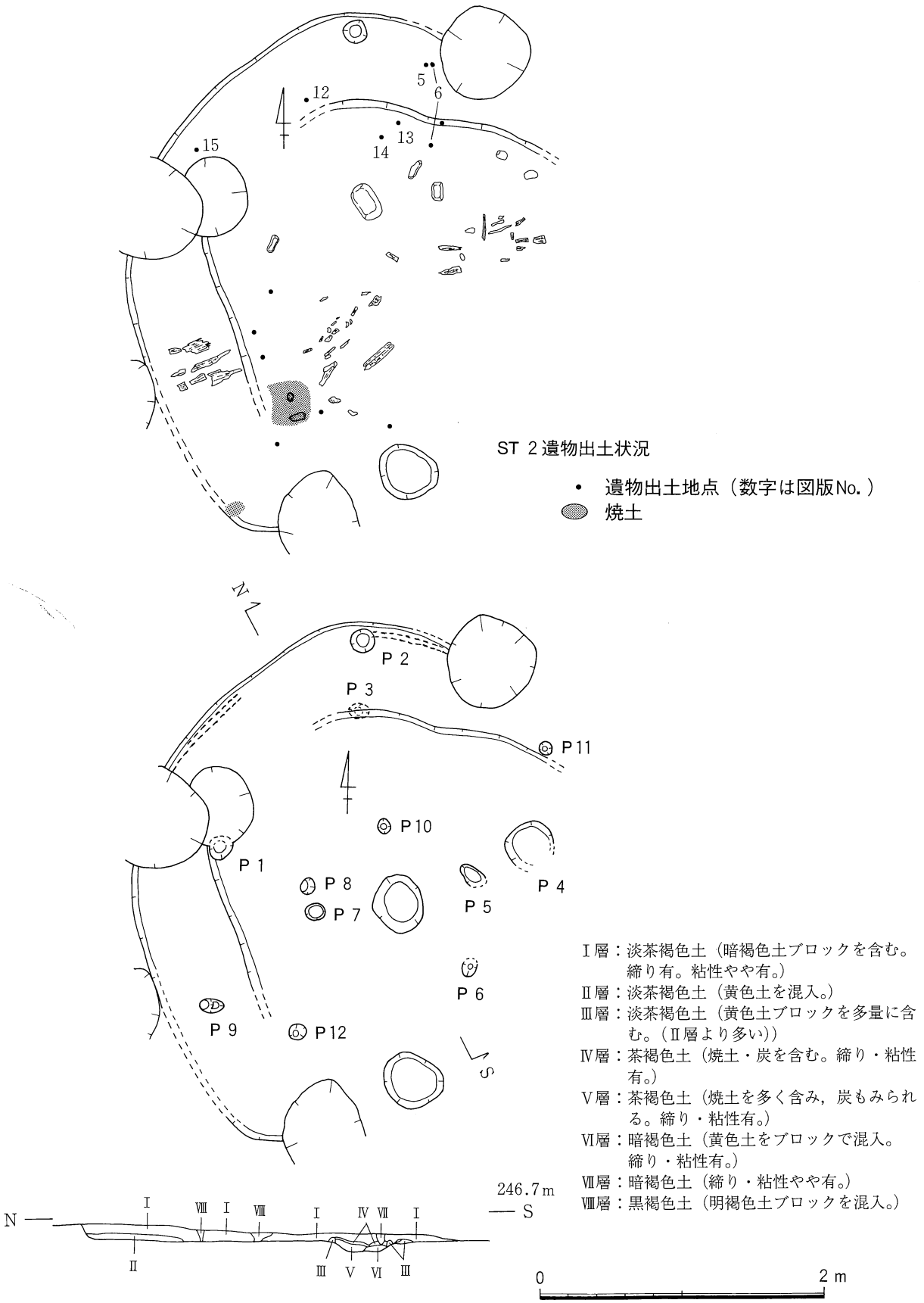


Fig. 9　ST 2遺物出土状況実測図，ST 2実測図及びセクション図

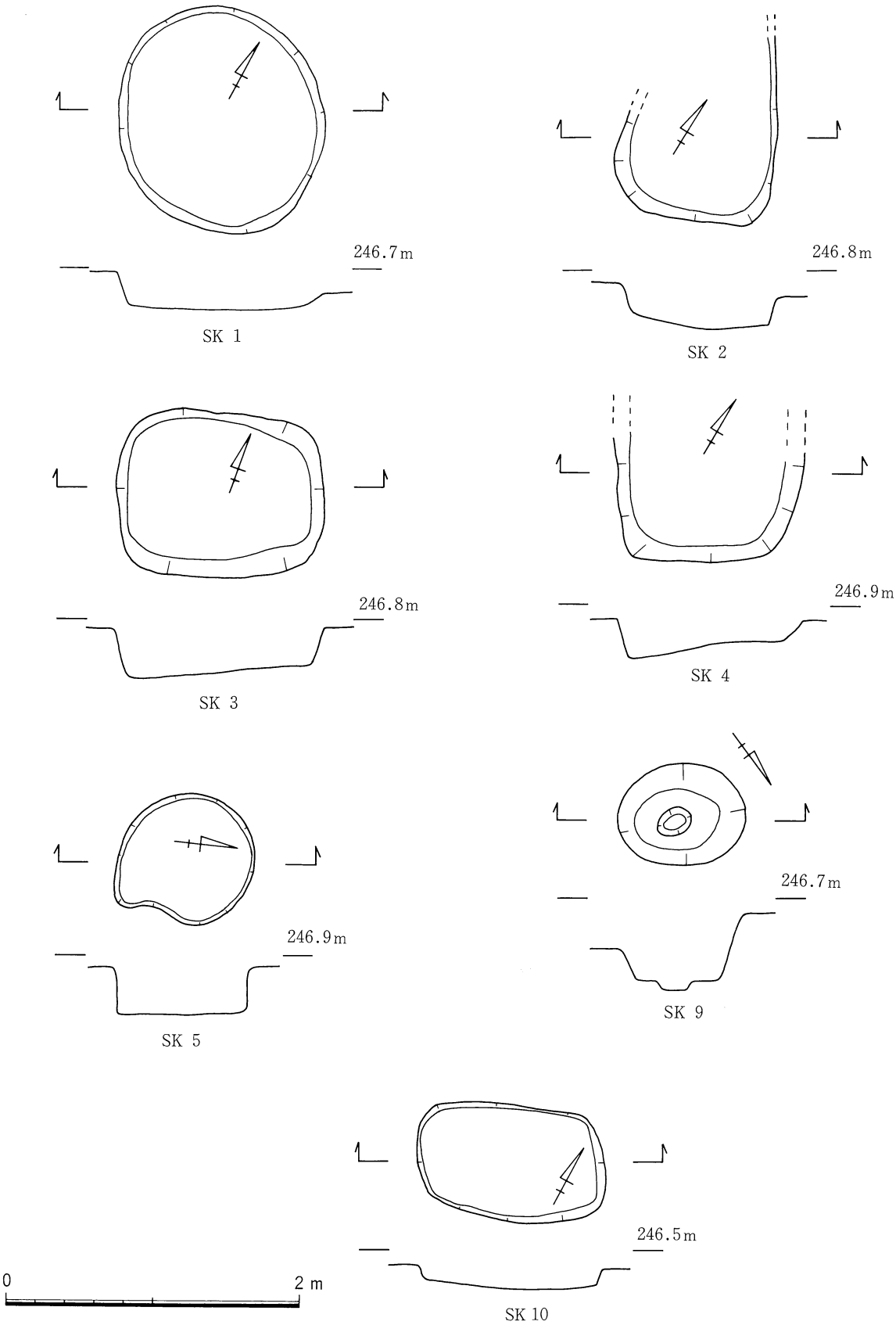


Fig. 10　SK 1～5，9，10実測図

SK 4 （Fig. 10）

SK 4は，SK 3の西にある。平面形は方形を呈すと考えられるが，約半分が調査区外に出ている。壁は急傾斜で立ちあがり，床面は西側が深く，東側が一段高い面をなす。埋土は濃茶色粘質土の単純一層で，埋土中より弥生終末か古式土師器の細片が9点出土していることから古墳時代の遺構と考えられるが図示できるものはない。

SK 5 （Fig. 10）

SK 5は，SK 4の西隣りにある。平面形は不整円形を呈し，長軸102cm，短軸90cm，深さ33cmを測る。壁は垂直に立ちあがり，床面は平坦な面をなす。埋土は濃茶色粘質土の単純一層で，埋土中より弥生土器の細片が数点出土しているが図示できるものはない。弥生時代後期に属する。

SK 9 （Fig. 10）

SK 9は，調査区中央の西にあり，ST 2を切っている。平面形は楕円形を呈し，長軸86cm，短軸70cmを測る。壁は急傾斜で立ちあがり，床面は中央部が凹む。埋土中より古式土師器の細片が1点出土している。

SK 10（Fig. 10）

SK 10は，調査区の東南にある。平面形は隅丸長方形を呈し，長軸126cm，短軸78cm，深さ9～16cmを測る。断面は舟底状を呈し，床面は凹状を呈す。埋土は濃茶色粘質土で，埋土中より弥生終末及び古式土師器の細片30点が出土しているが図示できるものはない。古墳時代に属する。

SK 11（Fig. 11・12・13）

SK 11は，調査区の西部にあり，長軸1.6m，短軸0.64mを測る長楕円形のプランを呈し，南端が新しい時期のピットによって切られている。深さは45cm前後を測り床面はほぼ水平である。壁面は何れも斜め方向に直線的に立ち上がる。埋土は，Ⅰ層：暗茶色粘質土，Ⅱ層：濃茶色粘質土からな

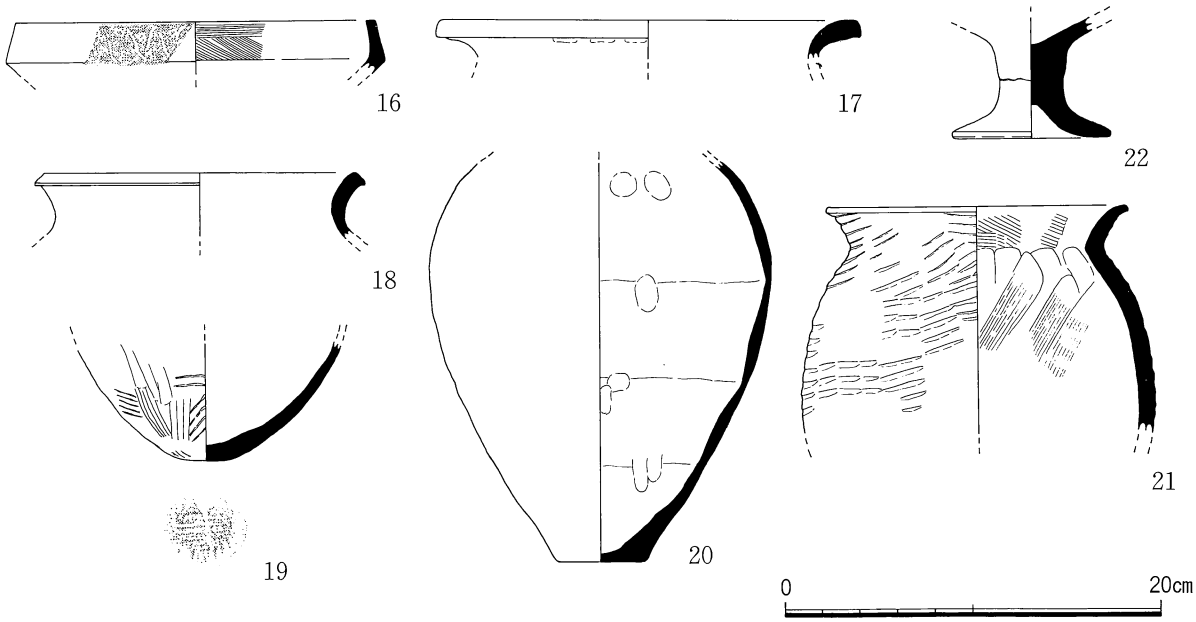


Fig. 11　SK 2（16），SK 3（21），SK 11（17・18・20・22），SK 13（19）出土遺物実測図

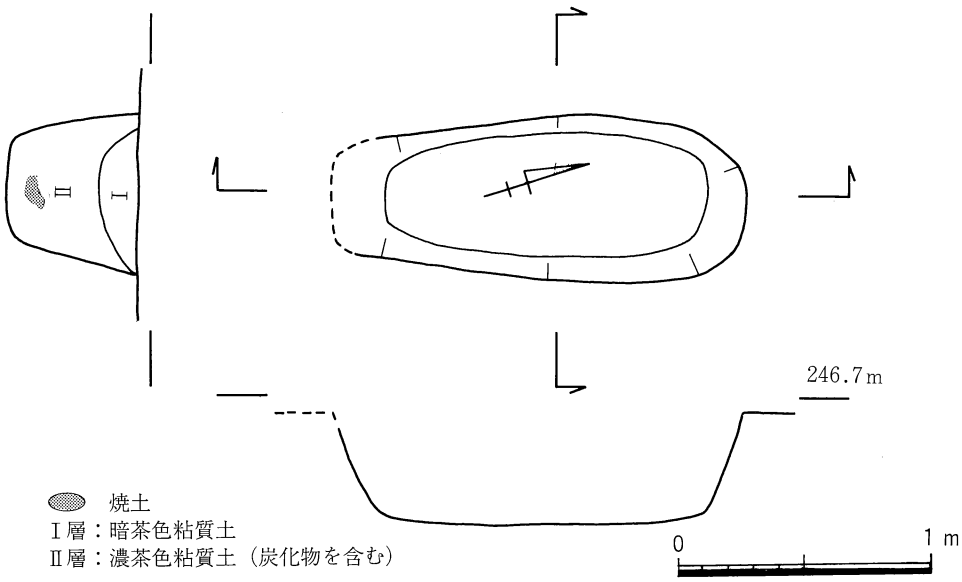


Fig. 12　SK 11実測図及びセクション図

り，Ⅰ・Ⅱ層共に炭化物を含み，Ⅱ層には焼土塊がブロック状に見られる。遺物はⅡ層から甕口縁部２点（17・18），同胴部（20），高坏脚部（22），及び結晶片岩を加工した打製石包丁が２点（23・24）出土している。床面出土の遺物は認められないが，一括性の高い資料として把握することができよう。20は内面をヘラ削り（下→上）した後ナデ調整を施しており，薄手の造りである。外面は全面煤けており胴下半は被熱赤変している。22は本県の中期末葉に希に見られる中実の柱状部をもった高坏である。中期Ⅲ－１期に比定することのできる資料である。

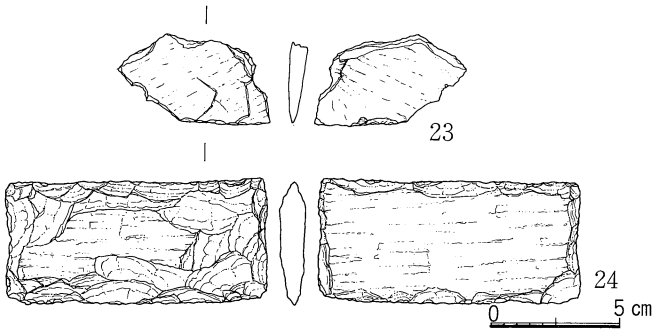


Fig. 13　SK 11出土遺物実測図

SK 11の性格は，形態・掘り方から見て墓である可能性がある。

SK 13（Fig. 11・14）

SK 13は，調査区の西北にある。平面形は楕円形を呈し，長軸108㎝，短軸92㎝，深さ22㎝を測る。壁は斜めに立ちあがり，床面は平坦な面をなす。埋土は濃茶色粘質土で，図示した甕底部（19）の他，弥生終末～古式土師の細片が多く出土している。これらの多くは，被熱赤変しているものが多い。

SK 14（Fig. 14）

SK 14は，調査区中央の西にある。平面形は隅丸長方形を呈し，長軸130㎝，短軸100㎝，深さ8.5～15㎝を測る。壁は西側急傾斜，東側緩やかに立ちあがり，床面はほぼ平坦な面をなす。埋土は濃茶色粘質土で，弥生終末～古式土師の細片16点が出土しているが，図示できるものはない。

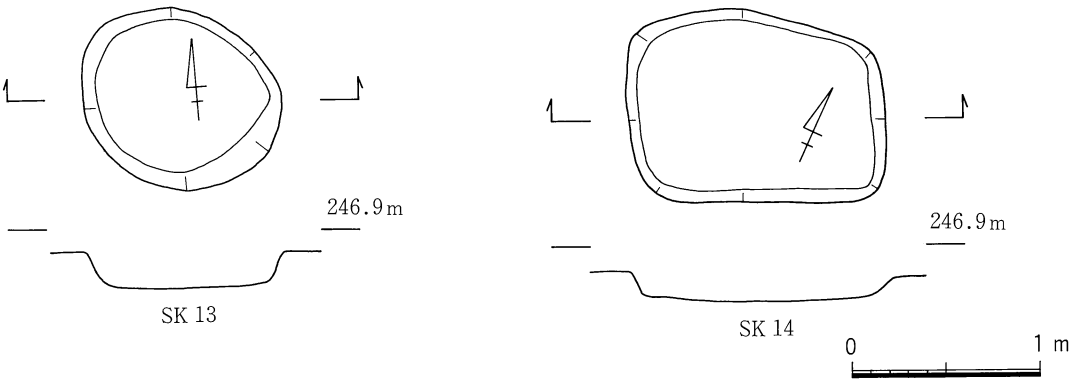


Fig. 14　SK 13，14実測図

SK 32（Fig. 15・16・17・18・19）

ST 2の床面で検出した土坑であり，ST 2に切られている。長軸1.17m，短軸1.07mの楕円形のプランを呈する。南壁側で小ピットと切り合っているが，先後関係は不明である。深さは1.25mを測り，断面形は逆台形状をなす。埋土は濃茶色粘質土単純一層で，埋土中より多量の弥生後期土器と結晶片岩の自然礫が出土している。遺物の圧倒的多数は上層から折り重なるように出土しており，中層からは完形の甕（21）が1点出土しているにすぎない。中層より下からは遺物・礫共に全く出土していない。これら一群の土器は出土状況から見て，SK 32が半ば埋まった段階で一時期に投げ込まれたものであり，極めて一括性の高い資料である。土器の組成は，壺（25～32・57），甕（33～51・53～56・60），鉢（52・58・59・63），高坏（61・62・64～68）である。口縁部から土器の組成比率を出すと壺：甕：鉢：高坏＝6：18：3：4となり，甕が最も多く全体の58.0％を占めている。また図示した甕のうち12点（33・35・37・38・40・43・44・47・49・50・54・56）が煤けており，壺も2点（27・31）が煤けている。また壺（29）の外面には黒色顔料を塗付している。

壺・甕共に1点づつ凹線文が見られる他はすべて粗縁であり，文様も列点文を施す壺が2点（28・30）ある以外は無文である。凹線文を有する2者（26・33）は，胎土中に当地域特有の結晶片岩を含んでいることから，在地産であることには違いないが，発色や砂粒の構成が他の多くの土器と異なっている。このうち甕（33）は古い時期のものが混り込んだものと考えなければならない。器面調整は，甕（50）の内面がヘラ削り＋指頭によるナデが施されているが，他の多くは壺・甕共に外面縦ハケ，内面指頭によるナデ調整を基調としている。SK 32出土のこれらの土器は，地域性も考えなければならないが後期中葉の時期に比定することができる。なおこの一群の土器の位置付けについては後述する。

SK 33（Fig. 20）

SK 33は，ST 2の南端にある。平面形は楕円形を呈し，長軸82cm，短軸72cmを測る。床面は南端が最も深く，北に向かって立ちあがり，床面近くに20cm前後の扁平な石を5個配している。検出面直下より甕の胴部（69）のほか，弥生終末～古式土師器の甕片10数点が出土している。埋土は濃茶色粘質土単純一層で，埋土中より弥生終末～古式土師器の甕15点，高坏のものとみられる器台片5

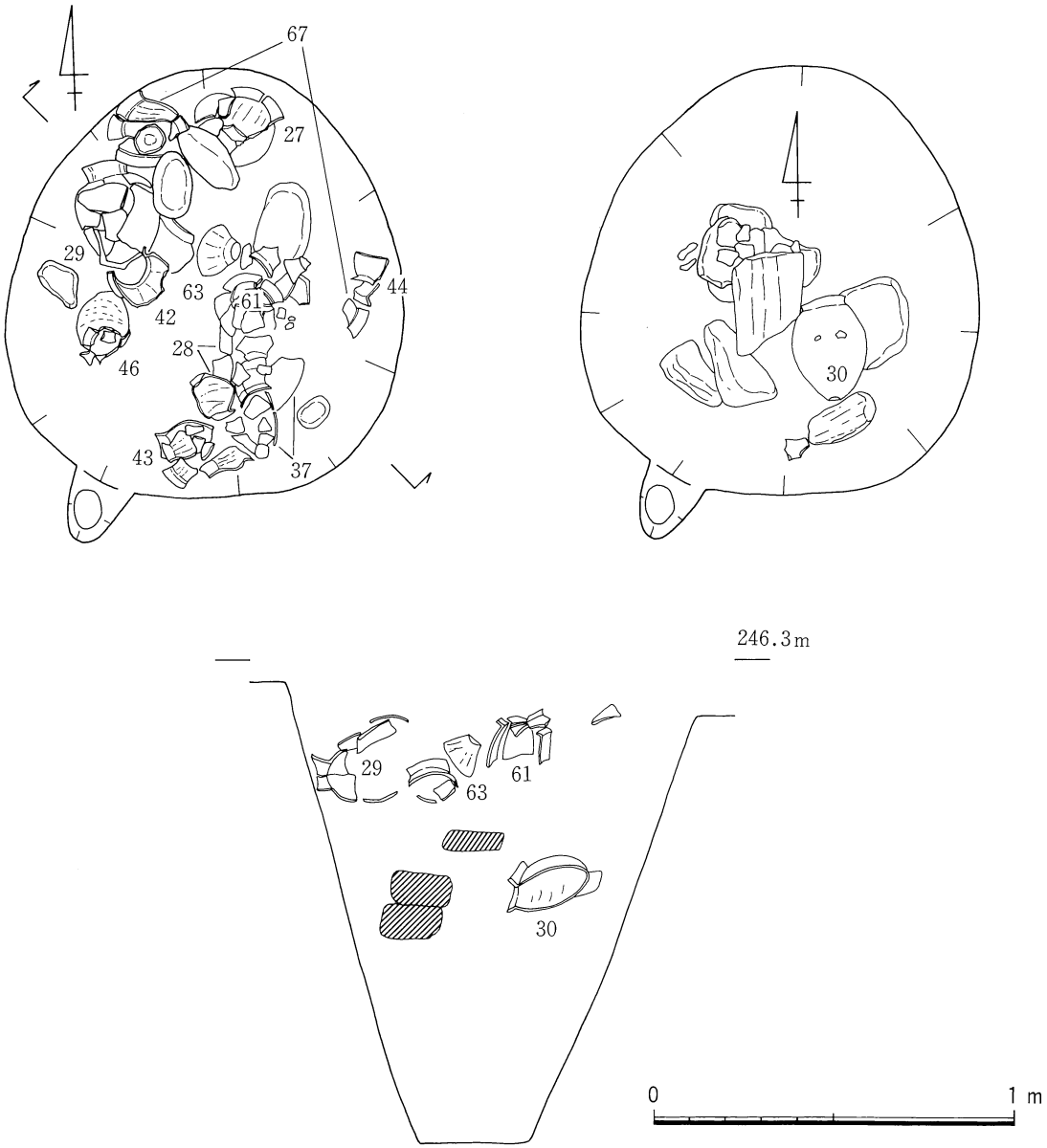


Fig. 15　SK 32遺物出土状況実測図（数字は図版No.）

点が出土している。古墳時代初頭に属する。

(3)　集中出土地点の土器（Fig. 21－70～73）

調査区西寄りのＦ１・２地点のⅥ層下位，弥生・古墳時代の遺構検出面上より，甕の３～４個体分の破片が長軸３ｍ，短軸１ｍほどの範囲から集中して出土した。これらの土器片群は何ら遺構に伴うものではないが，出土状況から見て原位置をほとんど動いておらず，この場所で棄損したものと考えられる。２個体分（70・71）は完形に復元することが出来た。出土土器は，すべて古式土師器１期に属する。このような例は，近接する堀ノ尻遺跡でも認められた。これらの土器は，堀ノ尻遺跡例も含めて激しく煤けており，かつ被熱赤変している。煮沸に供された後，再び使用されるこ

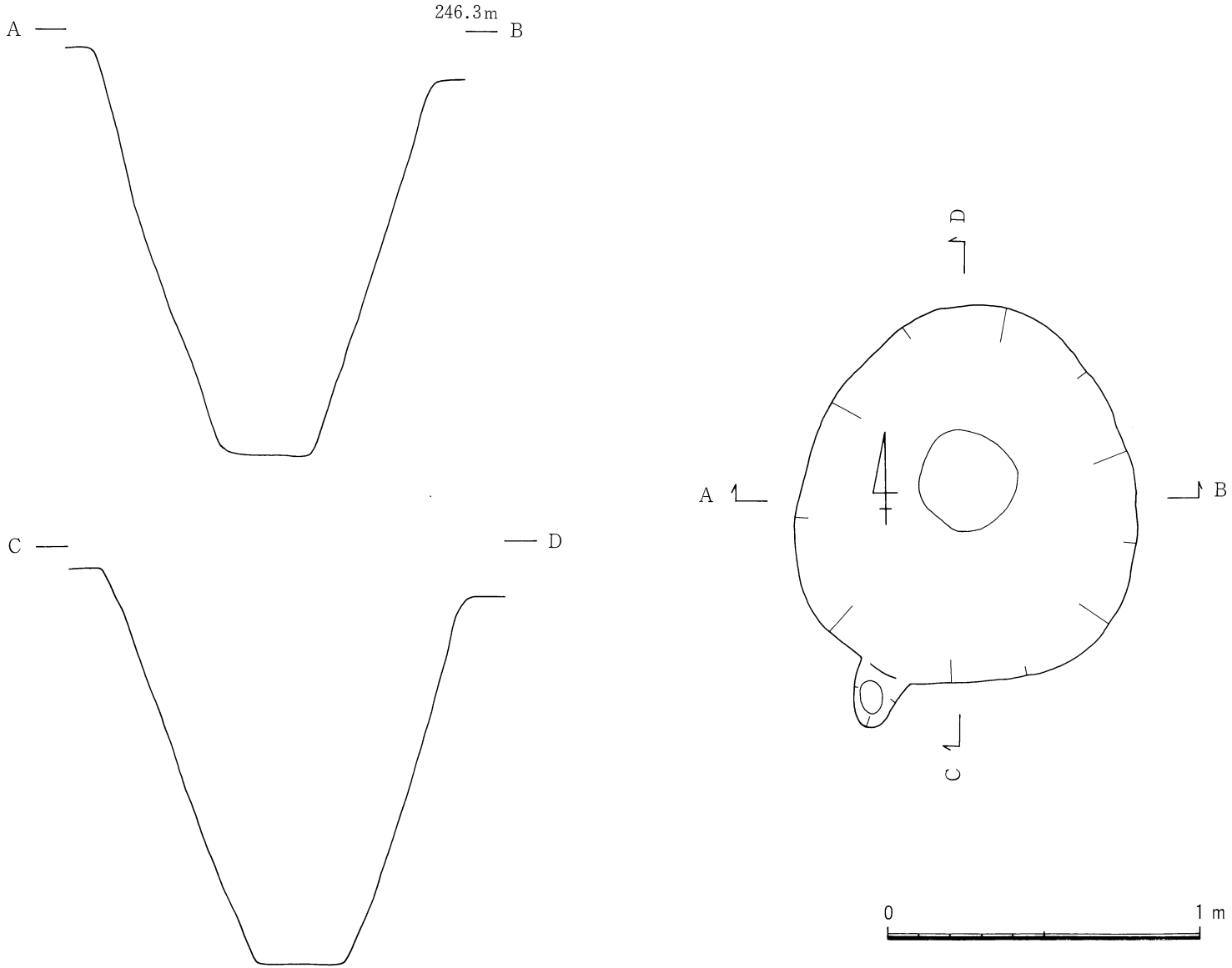


Fig. 16　SK 32平面図及び断面図

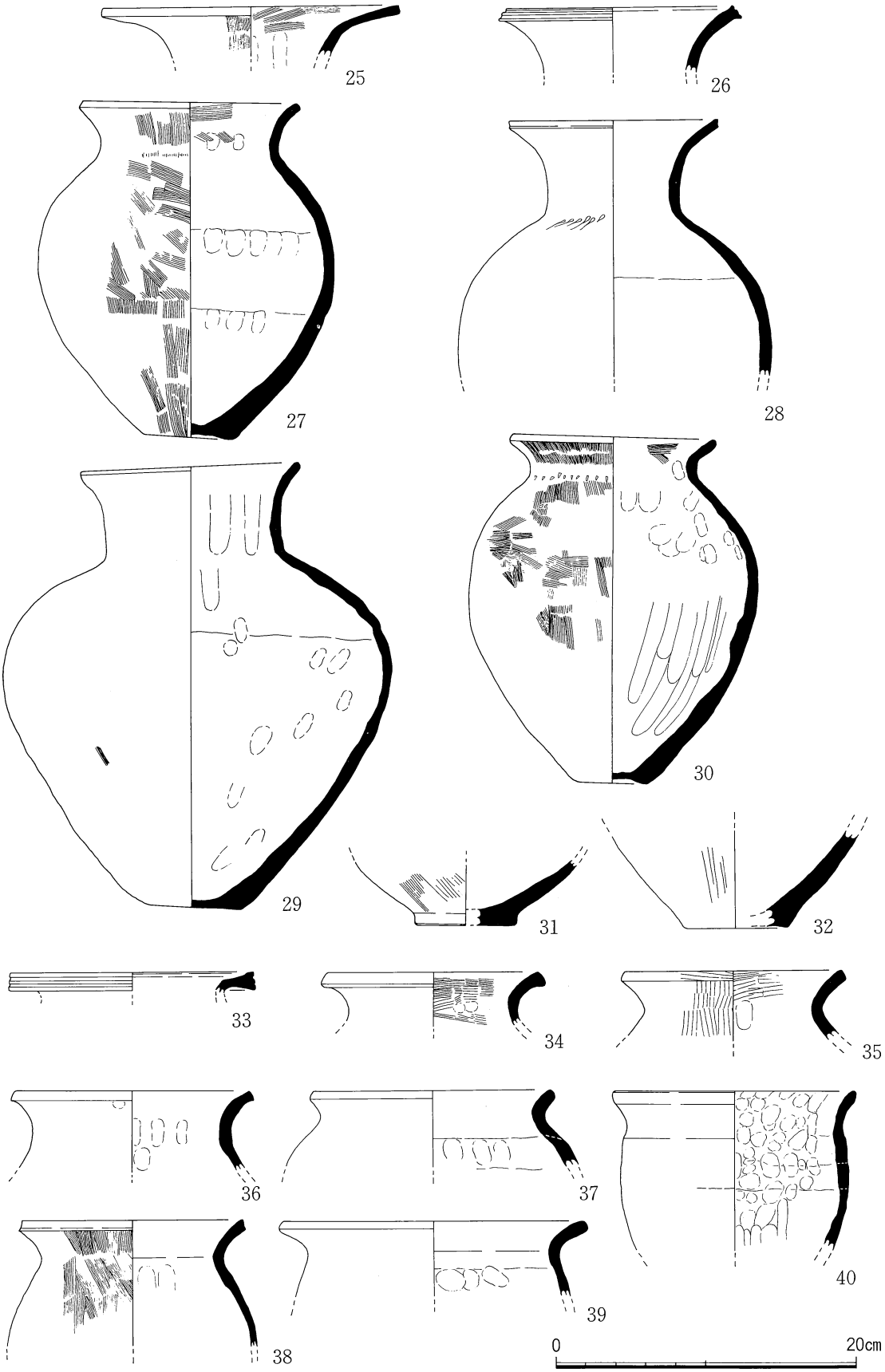


Fig. 17　SK 32出土遺物実測図（壺：25～32，甕：33～40）

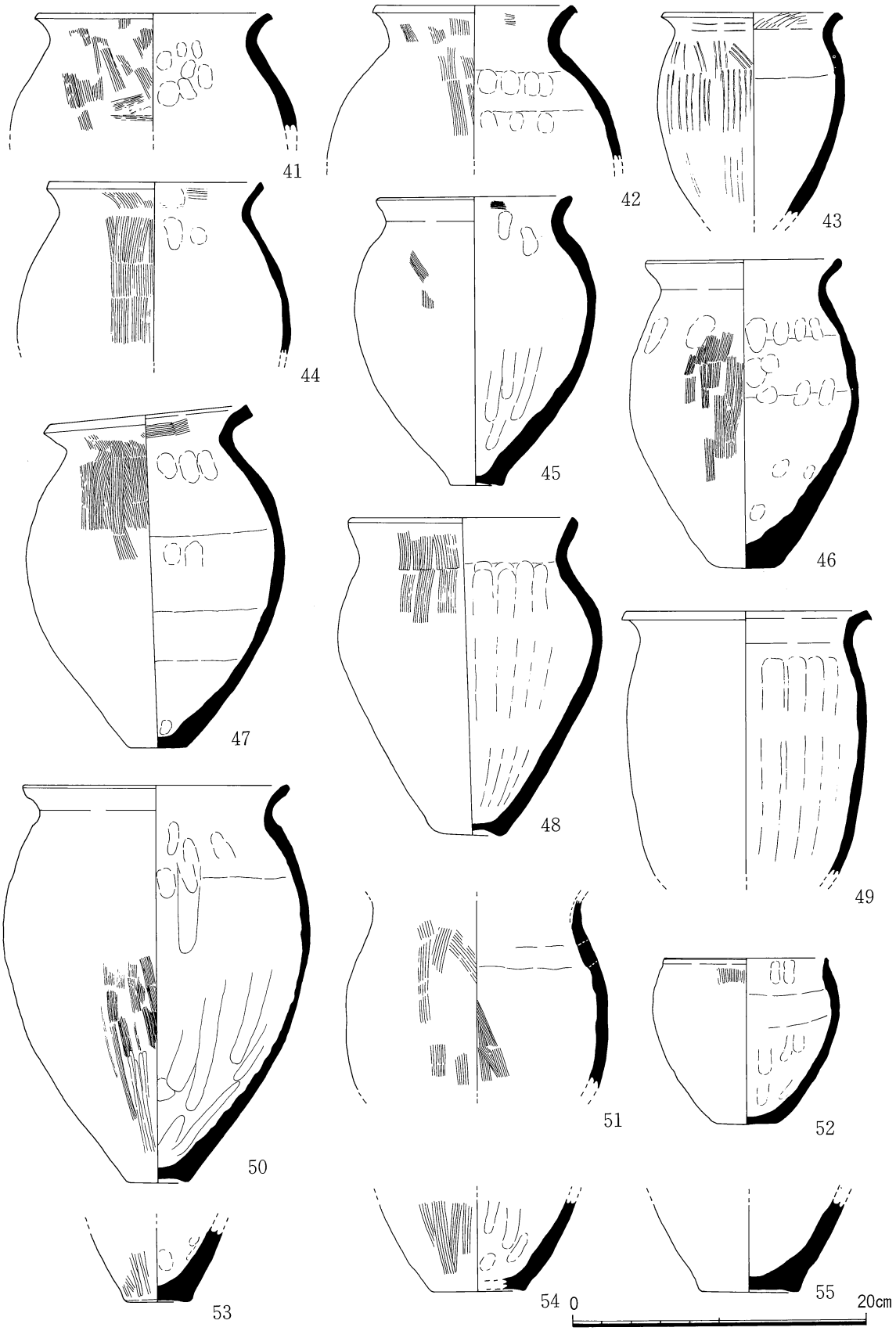


Fig. 18　SK 32出土遺物実測図（甕：41～51，53～55）

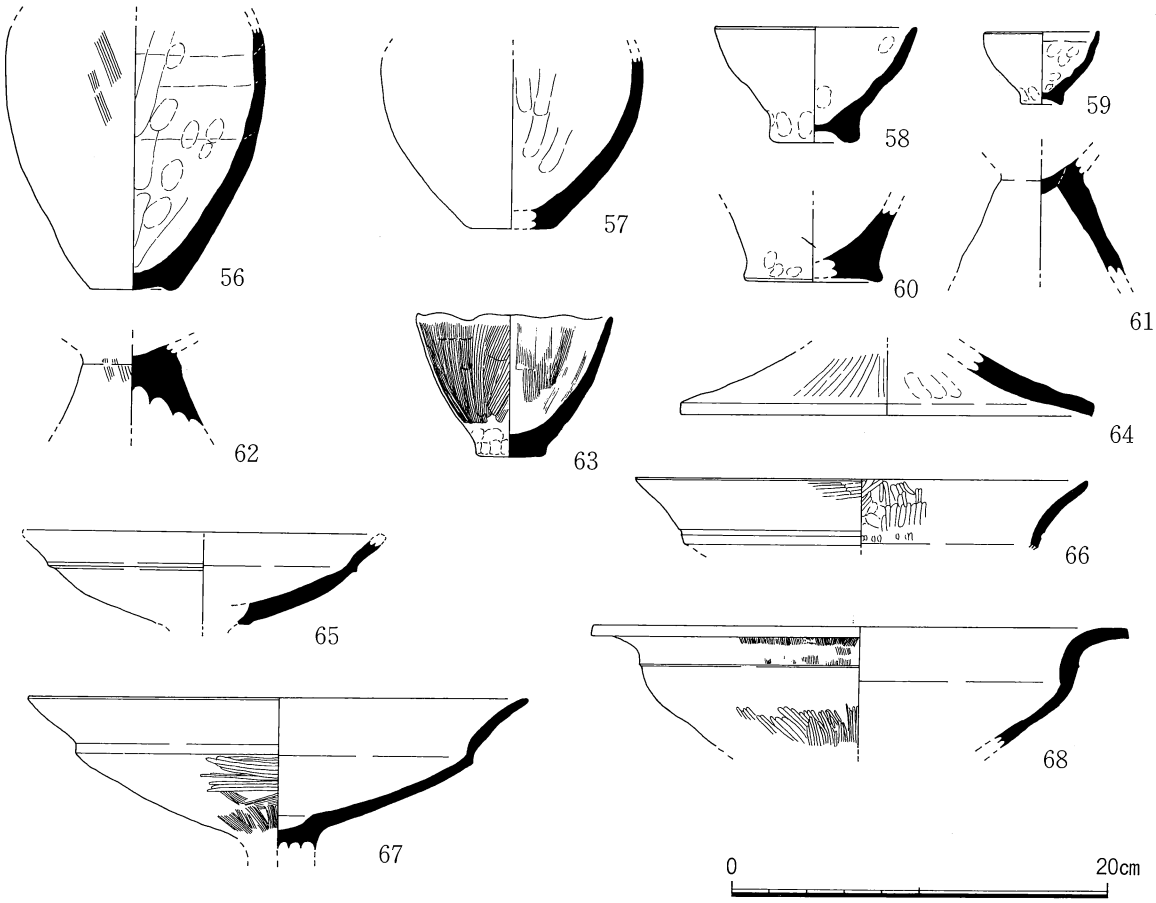


Fig. 19　SK 32出土遺物実測図（甕：56・60，壺：57，鉢：58・59・63，高坏：61・62・64～68）

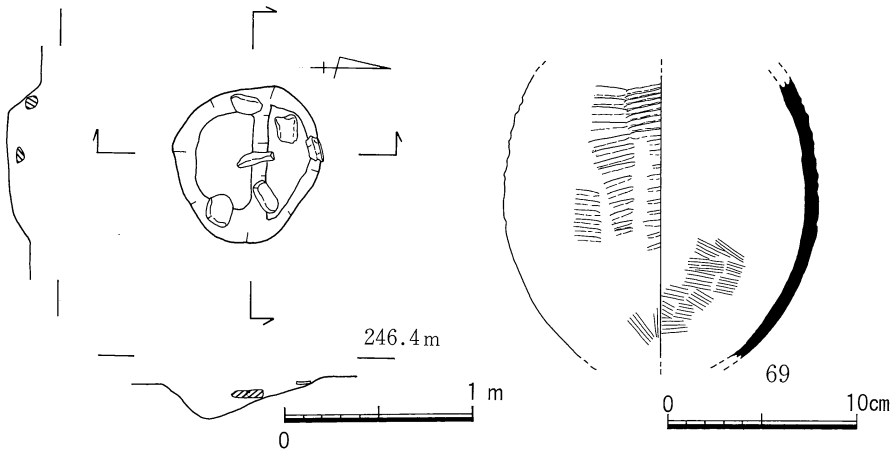


Fig. 20　SK 33及び出土遺物実測図

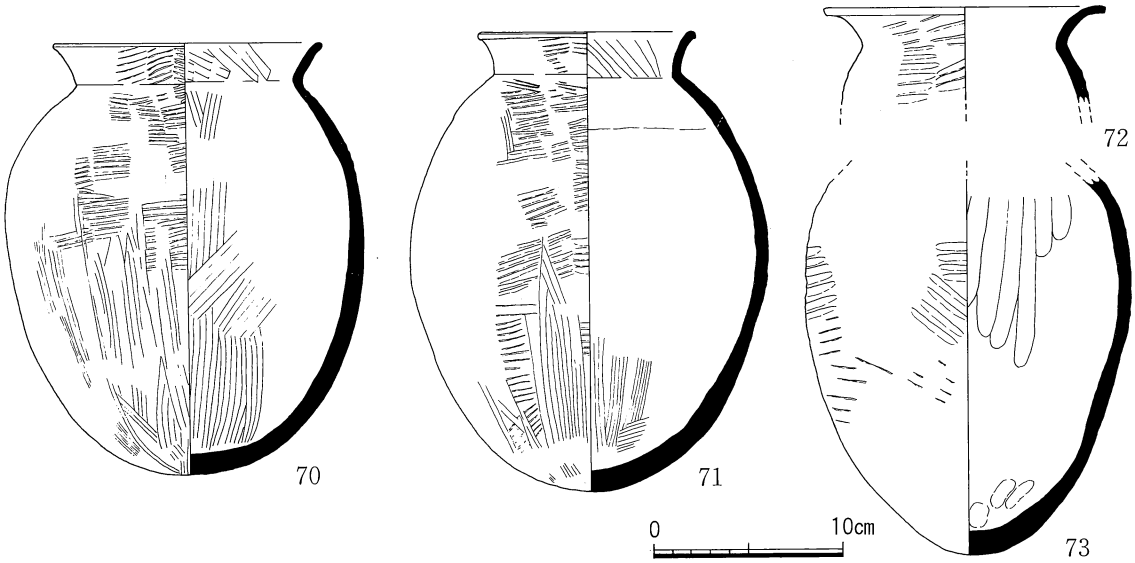


Fig. 21　集中地点出土遺物実測図

となく「放置」されたものと考えられる。この背景には煮沸を伴う祭祀のあった可能性がある。堀ノ尻例も甕3個体程度であり，この数は1つの単位を示すものであろう。

3．中世以降の遺構と遺物

(1)　土坑

SK 8（Fig. 23）

SK 8は，調査区北中央寄りにある。平面形は不整円形を呈し，長軸100cm，短軸82cm，深さ17～19cmを測る。埋土は灰茶色粘質土で，埋土中より土師器椀底部が1点出土しているが図示できない。

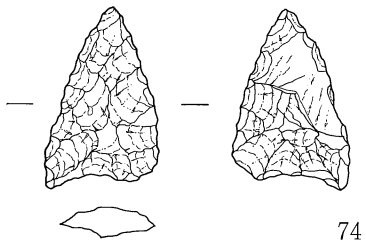


Fig. 22　SK 20出土の石鏃実測図（実大）

SK 12（Fig. 23）

SK 12は，調査区中央の西にある。平面形はほぼ円形を呈し，長軸96cm，短軸90cm，深さ16～21cmを測る。壁は急傾斜で立ちあがり，床面は平坦な面をなす。東南側でピットと切りあっているが，先後関係は不明である。埋土は明褐色のブロックの混じる黒褐色で，埋土中より中世の土師器皿細片数点，唐津溝縁皿片（76）1点，弥生終末～古式土師器細片が6点出土している。近世の土坑に属する。

SK 17（Fig. 23）

SK 17は，ST 1の北側に隣接し，一部ST 1を切る。平面形は楕円形を呈し，長軸184cm，短軸110cm，深さ8～36cmを測る。西側部分で一旦テラス状に緩やかに傾斜する段を形成した後，床面を形成する。埋土は濃茶色粘質土で，須恵器，土師器，弥生～古式土師器片が数点出土しているが，図示できるものはない。

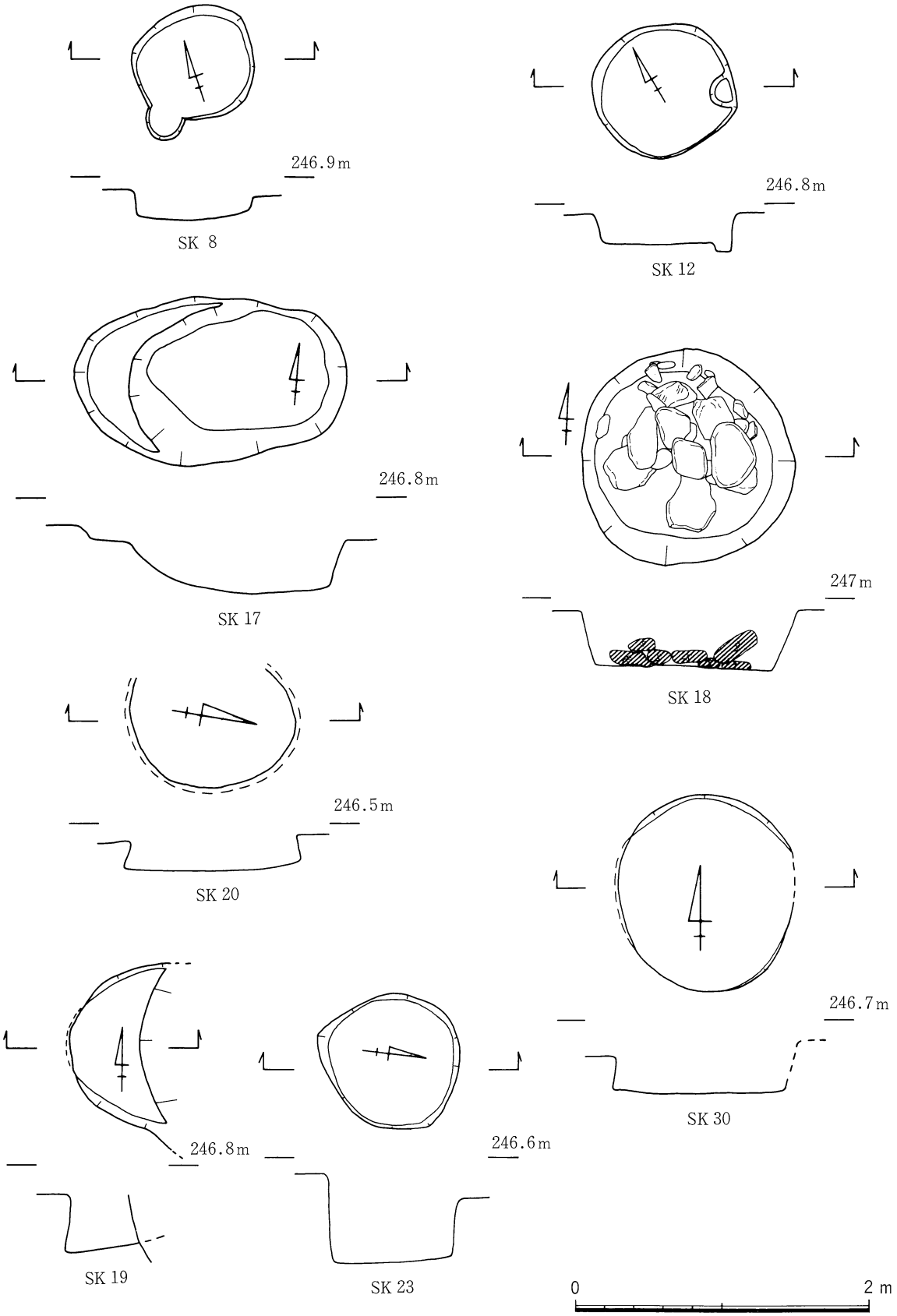


Fig. 23　SK 8，12，17～20，23，30実測図

SK 18（Fig. 23）

SK 18は，SK 17の東側にあり，ST 2・SK 19・SK 20を切っている。平面形は円形を呈し，長軸148cm，短軸142cm，深さ36～42cmを測る。断面は逆台形を呈し，床面は東にやや低く傾斜している。埋土は灰茶色粘質土で，古式土師器1点・弥生終末～古式土師器10数点，鉄片1点が出土しているが，図示できるものはない。SK 18の床面には，人頭大から拳大の扁平な結晶片岩が数多く積まれている。詳細な時期比定や性格は決め難いが，意図的に積み上げられたものであることには違いない。

SK 19（Fig. 23）

SK 19は，SK 18に切られているが，平面形は楕円形を呈すと考えられる。壁は西側一部分がオーバーハングしており，床面は西から東向きに緩やかに傾斜している。埋土は灰茶色粘質土で，弥生終末及び古式土師器片10点，土師器椀などの細片13点が出土しているが，図示できるものはない。

SK 20（Fig. 22・23）

SK 20は，ST 2のベッドを切っており，SK 18に切られているが，平面形は楕円形を呈すと考えられ，長軸130cm，短軸94cm，深さ16～20cmを測る。壁は全面的にオーバーハングしており，床面はほぼ平坦である。埋土は明褐色のブロックが混じる黒褐色で，弥生終末～古式土師器の細片25点，瓦器1点，石鏃（74）1点，中世の土師器10点が出土している。

SK 23（Fig. 23・24）

SK 23は，調査区の南西にある土坑群の中にあり，ST 2・SK 22・SK 34と切りあっている。平面形は円形を呈し，長軸98cm，短軸92cm，深さ60cmを測る。壁は垂直に立ちあがり，床面は平坦である。埋土は灰茶色粘質土で，床面より瀬戸の片口おろし皿大片（75）1点，中世の土師器細片2点，弥生終末～古式土師器細片3点が出土している。

SK 30（Fig. 23）

SK 30は，調査区のほぼ中央部にあり，SK 29と切りあっている。平面形は楕円形を呈し，長軸134cm，短軸120cm，深さ42cmを測る。壁は一部オーバーハングしており，床面はほぼ平坦である。埋土は明褐色のブロックが混じる黒褐色で，弥生終末～古式土師器片36点，瓦器1点，中世の土師器20点が出土している。

(2) ピット出土の遺物（Fig. 25）

100個余のピットを検出したが，性格不明のものが多い。主なものについては表－3に示した通りである。柱穴と考えられるものもあるが，掘立柱建物址や柵列等を復元することはできない。77（P 5）の白磁碗は，森田編年Ⅳ期[(2)]に属する。78（P25）は外底に「宣徳年製」銘

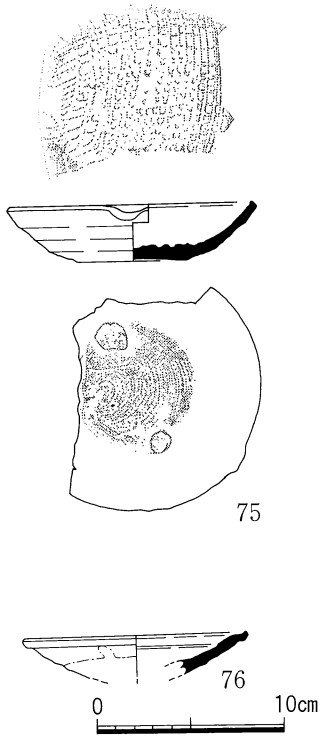


Fig. 24 SK 23（75），SK 12（76）出土遺物実測図

がある。伊万里染付小坏で，17世紀後半頃の所産であろう。79（P24）は伊万里染付碗である。80（P11）は瀬戸天目，81（P21）は口径46cmを測る土鍋で外面は激しく煤けている。82（P31）は小柄の柄である。鉄を芯にして浮彫り装飾を施した薄い銅板をかぶせている。浮彫りは2頭の馬であり表面に塗金のあとが認められる。

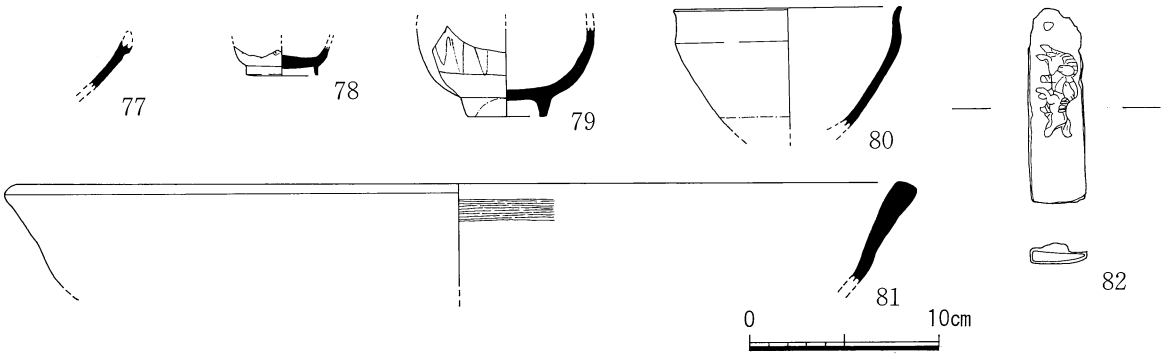


Fig. 25　ピット出土の遺物（77：P 5，78：P25，79：P24，80：P11，81：P21）（82は½）

(3)　包含層出土の遺物

各層ともに各時代の遺物が含まれているが，包含層遺物として説明する。

①　土器（Fig. 26）

Ⅳ層からは93・94など古式土師器の大型破片や完形に近いものが多く出土しているが，輪高台を有する土師器埦も出土している。注目すべき遺物としては，縄文晩期深鉢がある。83は口縁下7～8cmの位置に断面三角形の刻目突帯を貼付している。その他の層準からは，弥生中期の壺・同甕，後期の甕（86）・壺（87）・鉢（85）などと共に土師器埦（95）・坏（97）・鍋（91），青磁碗（90），須恵器の小型無頸壺などが出土している。

②　石器（Fig. 27）

5点の打製石包丁と打欠き石錘が出土している。石材はすべて吉野川流域に特徴的な結晶片岩を用いている。略方形を呈し両長側縁に刃部が造り出されている。102と103は両短側縁に抉りが認められる。104の石錘は，扁平な河原石の両長側の中央部を打ち欠いている。

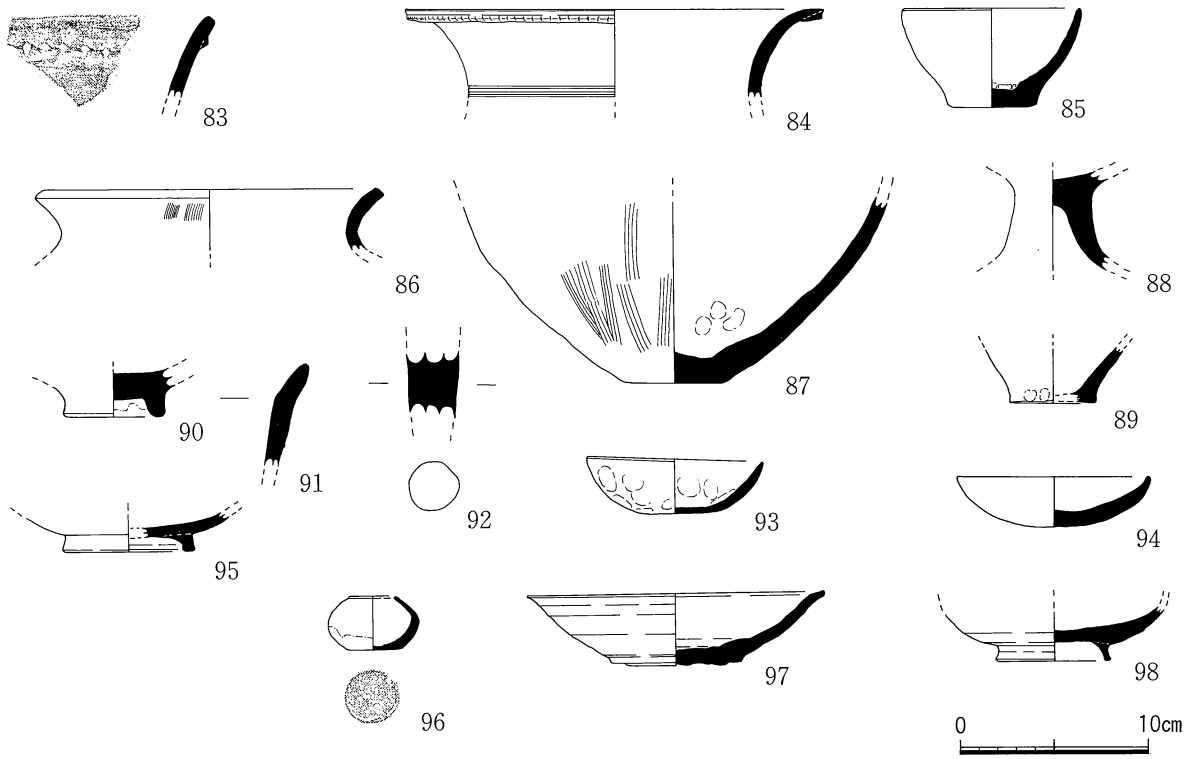


Fig. 26　包含層出土遺物実測図

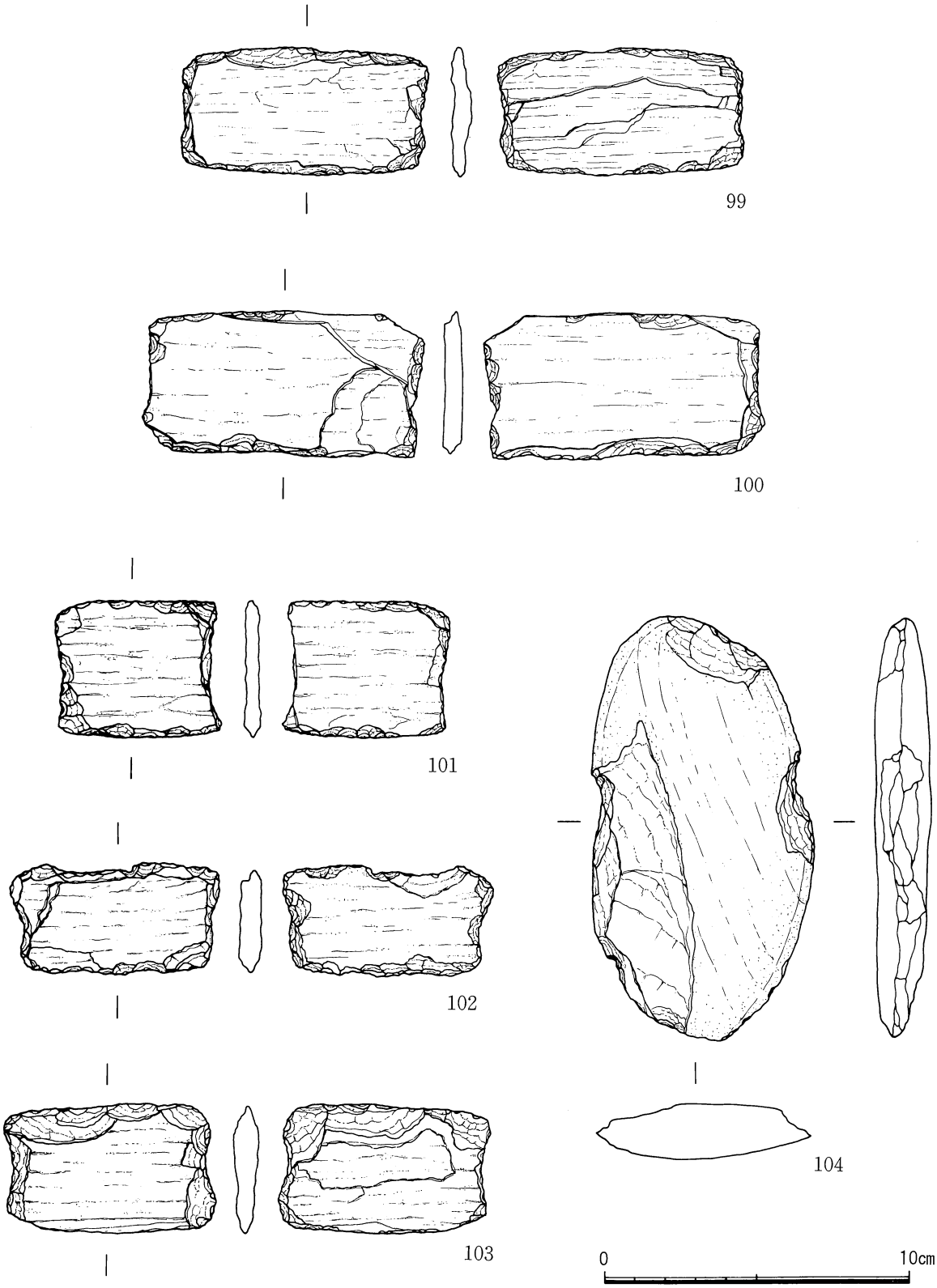


Fig. 27　包含層出土遺物実測図（石包丁：99～103，石錘：104）

表３　ピットの法量・形態及び出土遺物一覧表

P No.	計測値（cm）	深さ（cm）	平面形態	出　土　遺　物
1	60×？	25	不整形	鉄片１点
2	24×26	21	円　形	
3	38×44	8	〃	
4	直径34	38	〃	弥生土器２点，土師器１点 近世陶磁器１点，鉄片２点
5	直径44（柱痕跡有 径16）	10（柱痕跡16）	〃	白磁碗１点（図版No.77），鉄片１点
6	64×40	13	楕円形	弥生後期土器１点
7	34×30	48	〃	
8	直径34	35	円　形	土師器１点，須恵器１点
9	34×26	37	楕円形	弥生土器１点
10	44×40	50	円　形	土師器２点
11	直径68	61	〃	瀬戸天目１点（図版No.80），弥生土器１点
12	70×50	32	楕円形	土師器２点，唐津溝縁皿１点 鉄塊１点
13	直径66	36	円　形	青磁１点
14	直径74	21	〃	土師器４点，鉄塊２点
15	直径28	29	〃	弥生土器１点，土師器２点
16	直径38	47	〃	土師器４点
17	64×58	23	〃	弥生土器１点，土師器３点 須恵器１点
18	直径44	21	〃	弥生土器５点，土師器１点
19	直径40	46	〃	弥生土器５点
20	40×30	59	楕円形	弥生土器３点，礫１点
21	28×24	47	円　形	土師器鍋１点（図版No.81）
22	直径30	44	〃	弥生土器３点
23	22×16	28	楕円形	土師器１点
24	42×36	40	円　形	土師器１点，近世磁器碗１点（図版No.79）
25	直径32	51	〃	近世磁器碗１点（図版No.78）
26	直径50	18	〃	弥生土器10点
27	直径22	24	〃	弥生土器３点
28	直径30	28	〃	土師器４点
29	70×58	15	楕円形	弥生土器６点
30	直径28	32	円　形	弥生土器２点
31	直径26	22	〃	小柄の柄部１点（図版No.82）
32	直径26	15	〃	

第Ⅳ章　考　　察

1．SK 32出土の土器（Fig. 17～19）

SK 32埋土上層を中心に弥生後期土器がまとまって出土している。すでに述べたように，床面出土の土器は見られないが，SK 32が半ば埋まった段階で一気に投げ込まれた状況を示しており一括性の高い資料として把握することが可能である。嶺北地域における土器編年の充実，更に高知平野との比較を行う上において重要な資料となるものである。ここでは，当土器群に見られる諸特徴を抽出し，編年的位置付けと地域的特徴を明らかにするものである。

口縁部の点数をもとに土器組成を見ると，壺：甕：鉢：高坏が6：18：3：4となっている。ただ甕の口縁部細片（33）は中期の土器であり，この1点のみは混入遺物としなければならない。壺は，すべて広口壺であるが口頸部の形態から次の3つのタイプに分けることができる。A類：口縁部がラッパ状に強く外反する（25）。B類：直立気味に立ち上がる頸部から，緩やかに外反する口縁部を有する（26，28，29）。26は口唇に凹線文を有し，28は頸部下端に列点文を施している。C類：口頸部が丸味を帯びて短く外反する（27，29）。A類は後期後半以降～古墳時代初頭に盛行するタイプで，B類は後期初頭から顕在化するタイプである。C類は中期以来の伝統的なタイプであるが後期末になると見られなくなる。これらの壺は，外面ハケ，内面ナデ調整を基調とし，さらに内面には指頭による圧痕が見られ内面器表面の凹凸が顕著に認められる。27～29の内面には，4～5㎝幅の粘土帯の接合部が認められる。また27，30の底部は上げ底風に成形されており底部形態の特徴として把握することができる。

甕は，混入の33を除けば全て無文，器面調整は壺と同様で外面ハケ，内面指頭によるナデ調整を基調とし，指頭圧痕も顕著で内面の凹凸も激しい。ただ50のみ内面ナデ調整の下地にヘラ削りが，外面下半にヘラミガキが認められる。最大径は40と49が口縁部にあるが，他の諸例はすべて上胴部にある。口縁部は総じて丸味をおびてく字状に外反する。底部の形状も上げ底状を呈するものが目立ち壺と共通している。成形・調整手法も粗雑である。また18点中12点までが煤けており，中には被熱赤変して激しく煤けているものもある。

鉢は3例ともに小型で，上げ底状の底部が見られ指頭圧痕も顕著に認められる。この種の鉢は，後期末～古墳時代初頭に盛行するタイプで，その先駆と考えられる。高坏は全て口縁部が外反するタイプで，65は坏底部の剝離痕から見て脚部との分割成形手法による可能性が高い。

南四国における弥生後期土器の編年は，最も資料が豊富な高知平野中央部において7小期に組まれているが，それ以外の地域においては資料不足のために十分な地域編年がなされていないのが現状である。[(3)] 従って高知平野の編年のどの段階にあてはまるのかと言う作業を通して地域編年を組まざるをえない。SK 32出土の土器群は，底部成形に現れた特徴や小型鉢の出現などから後期4期に比定することが可能と考えられる。この特徴的な上げ底状の底部は，ドーナツ状の粘土紐または高台の上に底部を作り，周縁部が高まりをもって上げ底状となる成形手法であり，山陽の土器編年で高橋護氏がⅦ期とⅧ期とを画する相違点として指摘した成形手法に対応するものと考えられる。従って高橋編年のⅧ期の中に納まる土器群として大きく把握することは可能であろう。その中で[(4)]SK

32出土の土器群中には凹線文がほとんど認められないこと，また高坏の分割成形が認められることなどからⅧ－b期に併行関係をもとめたい。

上げ底状の成形法は，当該期の環瀬戸内に広く認められる特徴であり，松山平野では松山大学構内遺跡SB－7や祝谷アイリ遺跡SK 15，讃岐では下川津遺跡弥生土器溜り5などにみとめられる。甕から凹線文が消失し，前述の小型鉢の出現期としての共通性も有している。[5][6][7] 高知平野の資料中には当該期の好例は必ずしも多くないが，深淵遺跡のST 3を挙げることができる。ただST 3からは叩き痕跡を残す甕が少なからず出土している点が異なる。この相違の起因するところは，当地域の資料の増加を待って結論すべきところであるが，現段階においては太平洋側の高知平野と瀬戸内寄りの山間平野と言う地域差に求めたい。高知平野では，中期末以来土器に顕著に現れた吉備的特色が退潮しはじめる後期3期の時期から叩き痕跡を残す土器が漸進的に増加しはじめるが，当地域においてはその現象が遅れるものと考えられる。

2．永田遺跡の位置付け

今次調査では，古墳時代初頭の竪穴住居2棟（ST 1・2），弥生時代中期末（中期Ⅲ－1期）の土壙墓1基（SK 11），同後期の土坑2基（SK 5・32），古墳時代初頭の土坑7基（SK－1・4・9・10・13・14），同後期の土坑1基（SK 2），中世の土坑5基（SK 8・19・20・23・30），近世の土坑1基（SK 12），その他時期不明土坑16基，ピット多数を検出した。遺構の性格については不明なものが多いが，弥生後期から古墳時代初頭と中世に盛行期を有する遺跡として位置付けることができる。これは北接する嶺北高校校庭遺跡の消長に一致し，同一の集落址として把握しなければならない。永田遺跡の立地する吉野川右岸の低位段丘上には，天神前遺跡，銀杏の木遺跡など弥生後期終末から古墳時代を中心とする集落址の存在が確認されている。対岸正面の北山瀬ノ上遺跡からは中広形銅矛Ⅱ式が1本出土しているが，一連の集落址の展開とは無関係ではなかろう。[8] 更に対岸西方の松ノ木遺跡からも弥生時代終末から古墳時代初頭に属する竪穴住居が15棟確認されている。吉野川を挟んだ両岸の低位段丘上には，当該期の集落の爆発的な増加が認められるが，永田遺跡もその展開の一翼を担った遺跡として位置付けることができる。[9] ただし列挙した諸遺跡は弥生時代終末から始まっており，永田遺跡のように後期中葉ないしはそれ以前にまで遡る生活遺構の検出例は存在しない。今次調査では中期末の土壙墓も認められ，嶺北高校校庭遺跡からは凹線文土器や中期の石斧も出ており，少なくとも中期末から継続して営まれて来た集落址である可能性が強い。永田遺跡は，吉野川右岸における拠点的性格を帯びた遺跡として位置付けることができよう。[10] しかしながら古墳時代前期初頭を過ぎると，当遺跡をはじめ周辺から一斉に遺跡が消滅すると言う劇的な変化が生じる。高知平野の動向と呼応した動きとして注目しなければならない。以後この地域からまとまった遺物が出土するのは8世紀末から9世紀を待たなければならない。この時期の遺跡は，堀ノ尻遺跡に見られるように中位段丘上に移動しているようである。これは吉野川左岸においても認められる現象である。そして中世に至って集落が拡大するに及んで再び低位段丘上に集落が営まれるようになる。

註

(1) 出原恵三『堀ノ尻遺跡』高知県本山町教育委員会　1993年

(2) 森田晩・横田賢次郎「太宰府出土の輸入中国陶磁器について」『九州歴史資料館研究論集』4　九州歴史資料館　1978年

(3) 出原恵三「土佐の弥生後期土器編年」『土器からみた瀬戸内の弥生文化　瀬戸内の弥生後期土器の編年と地域性』古代学協会四国支部第四回大会資料　1990年

(4) 高橋護「山陽」『弥生土器1』ニューサイエンス社　1983年

(5) 梅木謙一他『松山大学構内遺跡 ― 第2次調査 ―』松山大学　松山市教育委員会・松山市埋蔵文化財センター　1991年

(6) 梅木謙一他『祝谷アイリ遺跡』(財) 松山市生涯学習振興財団　埋蔵文化財センター　1992年

(7) 大久保徹也「下川津遺跡における弥生時代後期から古墳時代前半の土器について」『瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告Ⅶ　下川津遺跡 ― 第2分冊 ―』香川県教育委員会 (財) 香川県埋蔵文化財調査センター　本州四国連絡橋公団　1990年

(8) 岡本健児『銀杏の木遺跡の発掘』高知県本山町教育委員会　1984年

(9) 出原恵三『松ノ木遺跡Ⅱ』高知県本山町教育委員会　1991年
前田光雄『松ノ木遺跡Ⅲ』高知県本山町教育委員会　1993年

(10) 岡本健児「嶺北高校校庭出土の遺物群」『長徳寺址発掘調査報告書』高知県本山町教育委員会　1977年

遺物観察表（土器）

挿図番号	出土地点	器　種	法量（cm） 口径 器高 胴径 底径	特　　徴	備　　考
Fig. 7-1	ST1	鉢	7.4 6.0 8.3 —	チャートの小礫，粗粒砂を多く含む。黄褐色。 内外面に指頭圧痕顕著。口縁は短くつまみ出す。 尖底であろう。	
Fig. 8-4	ST2	〃	— — — —	結晶片岩，チャートの小礫，粗粒砂を多く含む。淡灰茶色。 外面縦ハケ。丸底。	
Fig. 8-5	〃	〃	10.0 3.5 — —	チャートの細・粗粒砂を多く含む。桃茶色。 内・外面指頭圧痕顕著。	
Fig. 8-6	〃	〃	10.7 5.0 — 2.5	結晶片岩の小礫を多く含む。内外面共に器表の荒れが激しい。 にぶい黄橙。丸底風の平底。	
Fig. 8-7	〃	甕	— — — —	チャート，結晶片岩，長石の小礫，粗粒砂を多く含む。淡茶色。 縦ハケ調整がわずかに見られる。外面に指頭圧痕を残す。	
Fig. 8-8	ST2,P6	長頸壺	— — 18.0 —	長石の粗粒砂，小礫，石英，角閃石の粗・細粒砂を含む。赤茶色。 胎土中に赤色顔料を混入したものとみられる。	
Fig. 8-9	ST2	壺	— — — —	精選された胎土で，砂粒をほとんど含まない。にぶい黄橙。 内面・外面共に，ハケ状原体による横ナデを施している。口縁部の上部に右上がりのハケ調整跡がみられる。	
Fig. 8-10	〃	甕	11.4 — — —	チャートの小礫を多く含む。桃色。 叩き成形。口縁部叩き出しで，口唇は丸くおさめる。	外面一部煤ける。
Fig. 8-11	〃	〃	16.8 — — —	結晶片岩，チャートの小礫，粗粒砂を多く含む。桃茶色。 口縁内面は右上がりのハケがわずかに認められる。	
Fig. 8-12	〃	〃	17.6 — — —	河内産甕。角閃石，雲母などの細粒砂を多く含む。暗茶色。 内面は左から右方向のヘラ削り後ナデ調整と，右下がりの叩きに右下がりのハケ調整が加えられている。	口縁部外面は特に激しく煤ける。
Fig. 8-13	〃	〃	15.0 — — —	結晶片岩，チャートの小礫，粗粒砂を多く含む。茶色。 胴部外面に水平方向の叩きと，口縁外面，上胴部の一部に縦ハケ，内面に指頭によるナデが顕著にみられる。	全体的に煤ける。
Fig. 8-14	〃	〃	16.0 (17.3) — —	チャートの小礫を多く含む。茶色。 叩き成形にハケ調整が加えられている。	ほぼ全面が煤ける。
Fig. 8-15	〃	〃	— — — —	チャートの小礫・粗粒砂を多く含む。にぶい橙色。 横方向・右上がりの叩きが全体的に施された後，上部にハケ調整が施されている。内面接続部に指頭圧痕がみられる。	上部全体煤ける。
Fig. 11-16	SK2	壺	18.0 (2.9) — —	チャートの粗粒砂を少量含む。黄茶色。 内傾して立ち上がる口縁外面に半截竹管状の工具による波状文と波頭間に竹管状原体による刺突文がみられ，口縁部内・外面に右下がりのハケ調整が施されている。	
Fig. 11-17	SK11	甕	22.2 (2.0) — —	チャート，長石の小礫少量。細・粗粒砂多量。外面にぶい橙色，内面灰色。 口唇は幅広く面取り，口縁内外面は横ナデが施されている。	
Fig. 11-18	〃	〃	— — — —	長石，片岩，チャートの小礫，粗・細粒砂を多く含む。淡茶色。 口縁下端は，つまみ出し，横ナデ。	
Fig. 11-19	SK13	〃	— (6.3) — 2.4	チャート，他の粗粒砂を含む。底部まで叩き成形が施されており，わずかに平底が残る。底部付近の叩きは不定方向で，その上を縦ハケの調整が施されている。内面はナデ調整。	外面煤ける。

遺物観察表（土器）

挿図番号	出土地点	器　種	法量（cm） 口径 器高 胴径 底径	特　　徴	備　　考
Fig. 11-20	SK11	甕	— — — 4.5	チャート，長石の粗粒砂を多く含む。橙色。 器壁が薄く，内面に接合痕跡がみられ，内面ヘラ削りの上をナデ消している。外面のハケ調整は摩耗が激しい。	外面全面煤ける。
Fig. 11-21	SK3	〃	16.0 (12.1) — —	チャートの小礫を多く含む。灰桃色。 上胴部内面に強い指頭によるナデとハケ調整がみられる。	ほぼ全面的に煤ける。
Fig. 11-22	SK11	高坏	— (6.4) — 8.4	チャート，結晶片岩の細粒砂を多く含む。にぶい橙色。 裾は強く外反し，端部は丸くおさめる。外面に接合痕跡がみとめられる。 充実の脚部である。	
Fig. 17-25	SK32	壺	19.2 — — —	長石，チャート，結晶片岩，粗・細粗粒砂を多く含む。茶色。 外面縦，内面横方向のハケ調整がみられる。	内・外面，部分的に煤ける。
Fig. 17-26	〃	〃	16.0 (4.4) — —	チャート，雲母，角閃石，結晶片岩を含む。橙色。 口縁はラッパ状に外反しており，上下にわずかに拡張した口唇部２条の凹線文がみられる。	
Fig. 17-27	〃	〃	14.2 22.4 19.6 6.0	石英，チャート，長石の細・粗粒砂を含む。桃茶色。 胴上半に横方向及び右下がりのハケ調整，胴下半に縦方向のハケ調整がみられる。内面に接合痕跡を認める。	胴部外面下半全面煤ける。
Fig. 17-28	〃	〃	14.0 (17.1) 21.1 —	チャートの小礫多数，長石，粗粒砂を含む。淡黄白色。 外面頸部下に刺突文，胴部内面にわずかに横ハケがみられるが，内外面ともに摩耗が激しい。	
Fig. 17-29	〃	〃	14.4 30.2 25.5 6.2	チャート，石英の細・粗粒砂を多く含む。淡茶色。 上胴部に最大径を有す。直立気味の頸部から口縁部が外反し，口唇は丸い。 内面は指頭圧痕や指頭によるナデが顕著に見られるが，外面の調整は不明。	胴部外面に黒色顔料塗付。
Fig. 17-30	〃	〃	13.4 23.3 19.0 4.8	チャートの小礫，粗・細粒砂を多く含む。淡茶色。 頸部下端に刺突文列，口縁部内面に横，口縁部外面に縦方向のハケ調整が施され，胴部外面最大径付近に横方向，他は縦方向のハケ調整が認められる。内面下半には指頭によるナデ，上半には指頭圧痕が顕著。	
Fig. 17-31	〃	〃	— — — —	チャートの小礫，粗粒砂を多く含む。桃褐色。 円盤状の底部。	外面煤ける。
Fig. 17-32	〃	〃	— — — 3.6	チャート，長石の小礫，粗粒砂を多く含む。黄褐色。 底部はわずかに上げ底状。	
Fig. 17-33	〃	甕	16.2 — — —	チャートの小礫，粗粒砂を多く含む。茶色。 口縁部は上・下に少し拡張し，２条の凹線を巡らせる。内・外面横ナデ。	内・外面煤ける。
Fig. 17-34	〃	〃	14.0 (3.6) — —	チャート，長石の細・粗粒砂を多く含む。橙色。 口縁は丸味を帯びて外反。口唇はやや肥厚し，幅広い面をなす。内面横位のハケ。	
Fig. 17-35	〃	〃	14.4 (4.7) — —	石英，長石の粗・細粒砂を多く含む。濃茶色。 口唇は幅広い面。外面縦方向，口縁部内面横方向のハケ。木理の粗い原体。 口唇にも横ハケ。	外面煤ける。
Fig. 17-36	〃	〃	15.6 (5.3) — —	チャート，長石の粗・細粒砂を多く含む。桃茶色。	〃
Fig. 17-37	〃	〃	— — — —	チャートの小礫，細・粗粒砂を多く含む。淡茶色。 断面及び内面に粘土接合部を認める。幅は約３cm。 内面に指頭圧痕顕著。	〃
Fig. 17-38	〃	〃	14.8 — 16.5 —	チャート，長石，結晶片岩の小礫，細・粗粒砂を含む。灰茶色。	〃

遺物観察表（土器）

挿図番号	出土地点	器　種	法量(cm) 口径 器高 胴径 底径	特　　徴	備　　考
Fig. 17-39	SK32	甕	20.0 (5.0) — —	長石，チャートの細・粗粒砂を多く含む。明赤褐色。 内外面の調整不明。	
Fig. 17-40	〃	〃	16.0 (10.6) 15.2 —	チャートの小礫，粗粒砂を多く含む。橙色。 内面に指頭圧痕を多く残す。断面に1.5cm前後の単位で接合痕。外面被熱赤変し，剝離。	外面煤ける。
Fig. 18-41	〃	〃	15.6 (8.1) — —	石英，長石の粗・細粒砂を多く含む。茶黄色。 外面頸部及び胴部上半は右下がりを基調とするハケ，胴中位は横方向のハケが入る。内面指頭圧痕顕著。	
Fig. 18-42	〃	〃	13.5 — — —	チャート，長石の細・粗粒砂を含む。淡茶色。 口唇下端を下方につまみ出して横に強くナデる。内面に3.5cm幅の粘土帯接合痕跡を認む。	外面煤ける。
Fig. 18-43	〃	〃	11.8 (14.0) 12.7 —	長石，チャートの細・粗粒砂を含む。赤茶色。 口縁部は丸みを帯びて外反。口唇部は面をなす。口縁部内外面横方向，胴部外面木理の粗い縦ハケ。	胴部外面激しく煤ける。
Fig. 18-44	〃	〃	— — — —	チャートの小礫，長石の細粒砂を含む。灰茶色。	外面全面煤ける。
Fig. 18-45	〃	〃	13.2 19.5 — 3.5	チャート，長石の細・粗粒砂を多く含む。淡茶色。 内外面器表の荒れが激しい。胴部内面下半，指頭によるナデ。	
Fig. 18-46	〃	〃	13.2 20.9 — 4.0	チャート，結晶片岩の細・粗粒砂を多く含む。茶色。 口唇は丸くおさめる。内・外面指頭が顕著。内面に接合痕跡が認められる。外面縦ハケ。口縁部の一部に煤付着。外面ハケ調整を施すか。胴部中位以外は残りが悪い。	
Fig. 18-47	〃	〃	13.7 22.8 17.5 4.0	チャート，長石，砂岩の小礫，粗粒砂を多く含む。灰褐色。 口縁部内面わずかに右上がりの横ハケ。胴部外面縦ハケ。 内面に粘土帯接合痕跡を認む。	外面全面煤ける。胴部中位以下剝離。
Fig. 18-48	〃	〃	15.5 21.5 18.5 4.5	長石，結晶片岩，チャートの小礫，粗粒砂を含む。茶色。 極めて粗雑なつくり。頸部，胴部外面上半に縦方向のハケ。 内面はハケ状原体のナデの上を指頭でナデる。	
Fig. 18-49	〃	〃	16.4 (18.0) 16.2 —	長石，チャートの細・粗粒砂を含む。桃褐色。 内面指頭によるナデが顕著。口唇は面をなし強い横ナデ，わずかに下方につまみ出す。外面全面煤け，被熱赤変。	
Fig. 18-50	〃	〃	18.0 27.1 20.8 4.0	長石，チャートの粗粒砂を含む。橙色。 内面ヘラ削り＋指頭による強いナデ。外面細い原体による縦ハケを基調とし，下位に縦ヘラミガキ。外面被熱赤変。	外面全面煤ける。
Fig. 18-51	〃	〃	13.8 (12.9) 17.8 —	結晶片岩，長石，石英の細・粗粒砂を含む。明赤褐色。 胴部外面及び内面の中位以下縦ハケ調整。内外器表の剝離が激しい。	外面煤ける。
Fig. 18-52	〃	鉢	11.1 11.3 — 4.4	チャート，長石の小礫，粗・細粒砂を含む。上胴部に最大径を有す。外面口縁下に木理の粗いハケ。内面最大径付近に横方向の強いナデ。内面下位に指頭によるナデ。	
Fig. 18-53	〃	甕	— — — —	結晶片岩，チャートの小礫を含む。にぶい橙色。 わずかに上げ底状。外面縦ハケ＋縦ミガキ。	
Fig. 18-54	〃	〃	— — — 3.3	チャートの小礫を含む。外面ハケ調整。内面指ナデ＋ヘラナデ。外面被熱赤色。	外面煤ける。
Fig. 18-55	〃	〃	— — — 6.8	チャート，結晶片岩，長石の小礫，粗粒砂を多く含む。橙色。 底部部分的にミガキか。わずかに上げ底状の底部。外面はナデまたはヘラミガキ。	

遺物観察表（土器）

挿図番号	出土地点	器　種	法量（cm） 口径 器高 胴径 底径	特　　徴	備　　考
Fig. 19-56	SK32	甕	— — 13.8 4.5	チャート，長石，結晶片岩を含む。明褐色。 内面に指頭圧痕顕著。内面，断面に粘土の接合痕を認める。 ２～３㎝幅の内傾接合。	外面激しく煤ける。
Fig. 19-57	〃	壺	— — — 2.3	結晶片岩の小礫，長石の粗粒砂を含む。橙色。 内面指ナデ。外面ナデ調整。	
Fig. 19-58	〃	鉢	10.8 6.15 — 3.8	チャートの小礫，粗・細粒砂を含む。橙色。 底部付近に黒斑。外面の調整はほとんど観察不能なるもハケか。太い上げ底の底部。底部脇に指頭圧痕顕著。	
Fig. 19-59	〃	ミニチュア鉢	6.0 3.9 — 2.2	チャート，長石の細・粗粒砂を多く含む。灰色。 内外面指頭圧痕顕著。高台状の底部。	
Fig. 19-60	〃	甕	— — — —	チャートの小礫，粗粒砂を多く含む。にぶい橙色。 上げ底状の底部。外方に張り出す。底部脇に指頭圧痕顕著。	内底煤ける。
Fig. 19-61	〃	高坏	— — — —	チャート，長石，石英の小礫，細・粗粒砂を含む。淡茶色。 脚部はハ字状に開く。充塡法により，調整観察不可。	
Fig. 19-62	〃	〃	— (4.3) — —	石英の細・粗粒砂を含む。にぶい橙色。 脚外面に縦ハケ。	
Fig. 19-63	〃	鉢	10.35 7.6 — 3.1	石英，長石の細・粗粒砂を多く含む。橙色。 内・外面縦ハケ。底部脇に指頭圧痕顕著。弱い波状口縁をなす。下胴部に黒斑あり。	
Fig. 19-64	〃	高坏	22.0 — — —	チャートの小礫，細・粗粒砂を多く含む。桃茶色。 外面は木理の粗いハケ調整。口唇はしっかりした面。	
Fig. 19-65	〃	〃	19.0 — — —	チャート，雲母，長石の粗粒砂を多く含む。淡茶色。 口縁外面立上がり付近に突帯状の段。内・外面ナデ。	
Fig. 19-66	〃	〃	24.0 (5.7) — —	長石，チャートの小礫少量，同粗・細粒砂を多く含む。にぶい橙色。 外面屈曲部上ににぶい凹状ラインが走る。 内外面へラミガキを施すも，内面は特に丁寧。	
Fig. 19-67	〃	〃	26.4 7.5 (坏部)— —	石英，チャートの小礫，細・粗粒砂を多く含む。茶色。 大きさに比して器壁がうすい。口縁は明瞭な稜線をもって立ち上がり，大きく外反。充実の可能性あり。内面の調整は不明。外面脚部付近はハケ調整のみ。それ以外は横方向のへラミガキ。口縁外面はナデ＋ミガキか。	
Fig. 19-68	〃	〃	28.4 (6.5) — —	チャート，結晶片岩，長石の粗・細粒砂を多く含む。桃茶色。 断面灰色。坏部は丸味を帯びて立ち上がり，弱い段部が生ず。坏部外面中位以下に丁寧なへラミガキ。口縁部外面縦ハケ。内面は荒れが激しく，観察不可。	
Fig. 20-69	SK33	甕	— (15.0) 16.8 —	チャート，石英，結晶片岩の小礫，粗粒砂を多く含む。橙色。 外面水平方向の叩き。胴部内面下位に右下がりのハケ。外面被熱赤変。	
Fig. 21-70	F1集中	〃	14.2 23.2 19.0 —	チャート，結晶片岩の粗・細粒砂を多く含む。桃灰～灰褐色。 胎土・色調共にNo.39に酷似。叩き成形。胴部は水平方向，口縁部は左下がり。胴部外面中位以下に縦ハケ。内面も基本的には縦ハケ。口縁部内面は右下がりのハケ。	
Fig. 21-71	〃	〃	11.4 24.7 — —	結晶片岩，石英，チャートの粗・細粒砂を含む。灰褐色。 叩き成形。外面下半縦ハケ。内面底部付近もハケ。口縁部内面右下がりのハケ（目の粗い原体）。口縁叩き出し。上胴部断面に接合痕あり。丸底。	外面全面煤ける。
Fig. 21-72	F2集中	〃	15.0 5.3 — —	チャート，長石，石英の細・粗粒砂を多く含む。桃茶色。 叩き成形。口縁部叩き出し。	

遺物観察表（土器）

挿図番号	出土地点	器　種	法量（cm） 口径 器高 胴径 底径	特　　徴	備　　考
Fig. 21-73	F2集中	甕	— 20.2 17.3 —	チャート，長石の細・粗粒砂を多く含む。橙色。 胴部下半右下がり，中位より上は水平方向の叩き成形。内面は指頭によるナデ調整。丸底。一部煤け，被熱変色。	
Fig. 24-75	SK23	片口のおろし皿 （灯明皿に転用）	13.0 3.05 — 6.0	胎土は黄灰白色でやや粗。釉は透明度のあるうす緑，貫入あり。外面のほぼ全面に施釉。内面露胎。口縁端を内側につまみ出し，横ナデ。口唇は面をなす。外面はロクロ目顕著。底部糸切り。外底に２ケ所胎土目あり。内底は粗いタッチで格子に目を入れる。瀬戸焼。	内底煤ける。
Fig. 24-76	SK12	皿	11.8 (2.15) — —	胎土はやや粗く，釉はくすんだ緑色（オリーブ色）。 外面下半の露胎部は茶灰色。唐津焼。	
Fig. 25-77	P5	白磁碗	— — — —	胎土は灰白色でやや粗い。釉は白濁色。 白磁。	
Fig. 25-78	P25	碗	— — — 3.8	内外面共，白濁色の釉がかかるが，畳付けのみ露胎しており，胎土目が少量みられる。見込み部は円錐形を呈する。胎土は密・堅緻。染付の呉須はうす青で高台部の文字はにぶ青。中国の宣徳年製をまねたものか。	
Fig. 25-79	P24	〃	— — — —	胎土は白色堅緻。釉は白濁色，全面貫入。 断面逆台形の高台がやや長くのびる。高台外面にまで施釉。畳付けに胎土目付着。下胴部外面に界線，その上に波状文。近世の染付。	
Fig. 25-80	P11	瀬戸天目	12.0 (6.5) — —	胎土は黄白色でやや粗い。内外面に黒褐色の釉がかかる。断面は灰白色。 外面下位の露胎部も黄白色。横方向の削り。	
Fig. 25-81	P21	土鍋	46.0 (5.5) — —	石英，長石の細・粗粒砂を多く含む。内外面茶色。 内面は丁寧な横ハケ。外面は粗いナデ。	外面激しく煤ける。
Fig. 26-83	包含層 （Ⅳ層）	深鉢	— — — —	長石，石英を含む。内面黒色。外面淡茶色。 口唇面取り。口縁下７～８㎜の位置に断面三角形の刻目突帯貼付後，上下を強く横ナデ。内面は横方向の粗い擦痕＋横ヘラミガキ。晩期深鉢。	
Fig. 26-84	〃 （Ⅰ・Ⅱ層）	壺	22.2 (4.7) — —	チャートの小礫，細・粗粒砂を含む。内面浅黄色，外面にぶい黄橙色。口縁部外面に幅1.5㎝の粘土帯を貼付，口唇下端に刻。粘土帯は指頭で押圧。頸部に櫛描文。頸部外面に縦方向のハケ。内面ナデ，ハケ＋櫛。	外面煤ける。
Fig. 26-85	包含層	鉢	9.4 5.3 — 4.8	チャートの小礫を多く含む。にぶい黄橙色。 内外面器表の剝離が激しい。	
Fig. 26-86	〃	甕	17.5 — — —	石英，チャートの砂粒を多く含む。橙色。 外面わずかにハケ調整をとどめる。口縁は丸く外反し，口唇は面をなす。	
Fig. 26-87	〃	壺	— — — 5.4	チャートの小礫，粗粒砂を多く含む。にぶい橙色。 外面木理の粗いハケ調整。	外面は煤けか，黒色顔料塗付か。
Fig. 26-88	〃 （Ⅱ層）	高坏	— — — —	長石，石英，チャート，結晶片岩の小礫，細・粗粒砂を多く含む。 調整不明。	
Fig. 26-89	〃	鉢	— — — 2.3	長石の粗・細粒砂を多く含む。にぶい橙色。 内面はナデ調整を施しているが摩耗。わずかに上げ底状の底部。	
Fig. 26-90	〃	青磁碗	— (2.6) — (5.0)	胎土は灰色でやや粗く，釉は緑濁色。 高台内面まで施釉。畳付けは丸くおさめる。露胎部（外底）は灰褐色。	
Fig. 26-91	〃 （Ⅱ層）	土鍋	— — — —	石英，長石の粗粒砂を多く含む。黄茶色。 口縁は内面に稜を有して外反，外側がわずかに肥厚する。	外面激しく煤ける。

遺物観察表（土器）

挿図番号	出土地点	器　種	法量（cm） 口径 器高 胴径 底径	特　　徴	備　　考
Fig. 26-92	包含層 （Ⅰ層）	鍋の脚	— (3.7) — —	石英，長石，雲母の細・粗粒砂を多く含む。明赤褐色。 径2.7～2.4cm。	
Fig. 26-93	〃 （Ⅳ層）	鉢	9.8 3.1 — 2.7	チャート，長石，結晶片岩，石英の小礫，粗粒砂を多く含む。にぶい黄橙色。 外面ナデ。弥生終末～古墳初。	
Fig. 26-94	〃	〃	10.2 2.7 — —	石英，チャート，結晶片岩の小礫，細・粗粒砂を含む。灰白色。 充塡粘土板の剝離したもの。	
Fig. 26-95	〃 （Ⅱ層）	内黒埦	— (2.0) — 7.0	精選された胎土。雲母粒子を認む。外面にぶい橙色。 しっかりした高台をやや外向きにはりつけ，端部は内側に肥厚。内面を強く横ナデ。体部内外面ヘラミガキ＋内面炭素吸着。	
Fig. 26-96	〃	無頸壺	2.4 2.8 4.8 2.8	胎土はほとんど砂粒を含まない。内外面とも自然釉がかかる。	
Fig. 26-97	包含層	坏	15.8 3.9 — 4.9	精選された胎土。黄褐色。ロクロ成形。 口縁端部をわずかにつまみ上げる。底部ヘラ切り。内外面横ナデ。	
Fig. 26-98	〃 （Ⅳ層）	埦	— — — 6.0	チャートの粗粒砂をわずかに含む。淡黄橙色。 高台はハ字状。内外面調整の観察不可。	

遺物観察表（石器）

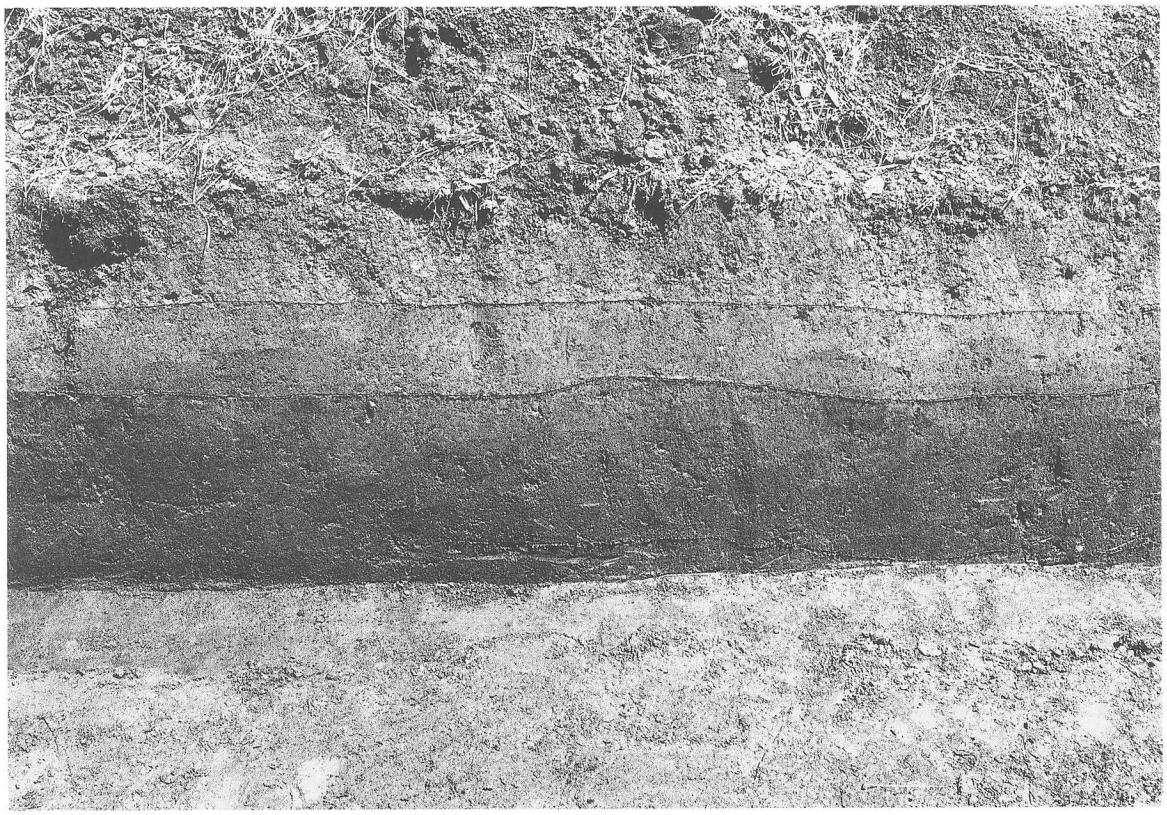
挿図番号	出土地点	器　種	法量(cm) 長軸 短軸 厚さ 重さ(g)	石　材	特　　徴	備　考
Fig. 7-2	ST1	石錘	9.3 7.9 2.8 248	結晶片岩	扁平な河原石の両端を打ち欠いている。	
Fig. 7-3	〃	叩石	17.7 5.1 3.2 555	緑色片岩	棒状を呈し，一方の端部に顕著な使用痕が認められる。	
Fig. 13-23	SK11	石包丁	6.2 3.4 0.8 13.6	サヌカイト	スクレイパーの可能性もある。両面から刃部を造り出す。	
Fig. 13-24	〃	〃	10.1 4.9 1.0 86.1	紅簾片岩	均正の長方形を呈し，四側縁すべてに調整痕が認められる。	
Fig. 22-74	SK20	石鏃	2.4 1.5 0.4 1.0	サヌカイト	凹基式で基部の一端を欠く。	
Fig. 27-99	包含層	石包丁	8.1 4.2 0.7 33.0	結晶片岩	長方形を呈し，四側縁に調整が認められる。	
Fig. 27-100	〃 (V層)	〃	9.1 4.8 0.6 49	緑簾片岩	〃	
Fig. 27-101	包含層	〃	5.4 4.5 0.5 21.9	結晶片岩	長方形を呈するが，短側縁がわずかに凹状を呈す。一部欠損。	
Fig. 27-102	〃	〃	6.9 3.7 0.7 34.0	紅簾片岩	略長方形で短側縁に抉り，四側縁共に調整痕あり。	
Fig. 27-103	〃 (Ⅳ層)	〃	6.9 4.3 0.9 36.0	結晶片岩	〃	
Fig. 27-104	包含層	石錘	14.0 7.3 1.8 264	緑色片岩	河原石の剝片を利用して，長側縁の中央部を打ち欠く。	

写　真　図　版

試掘調査（西から）

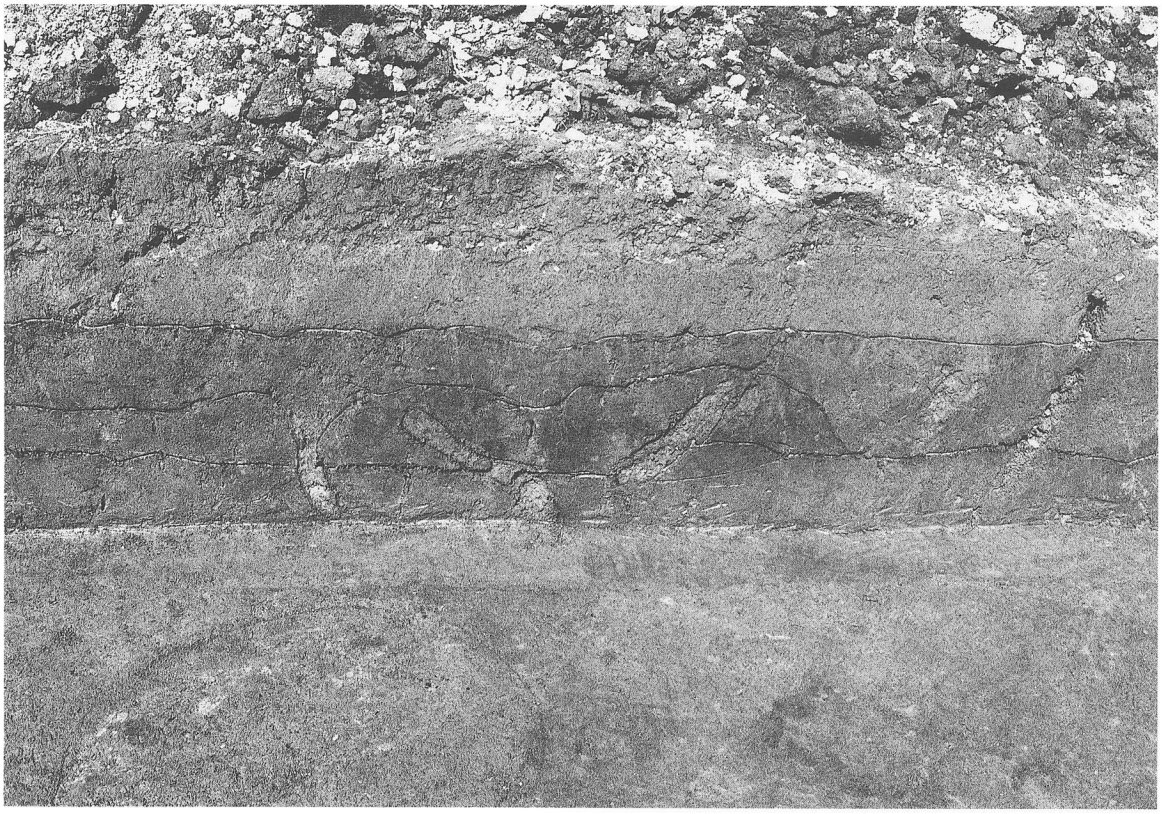
同上（南から）

PL 2

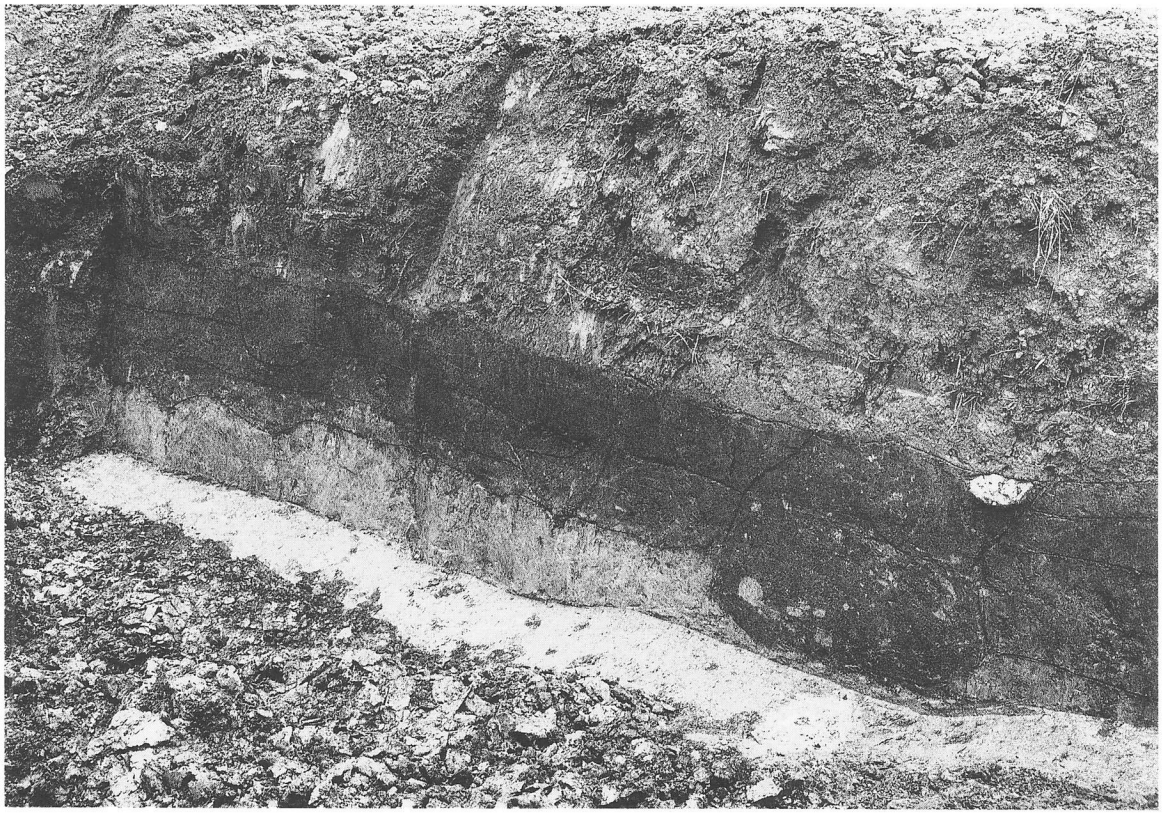


東区北壁セクション

同上

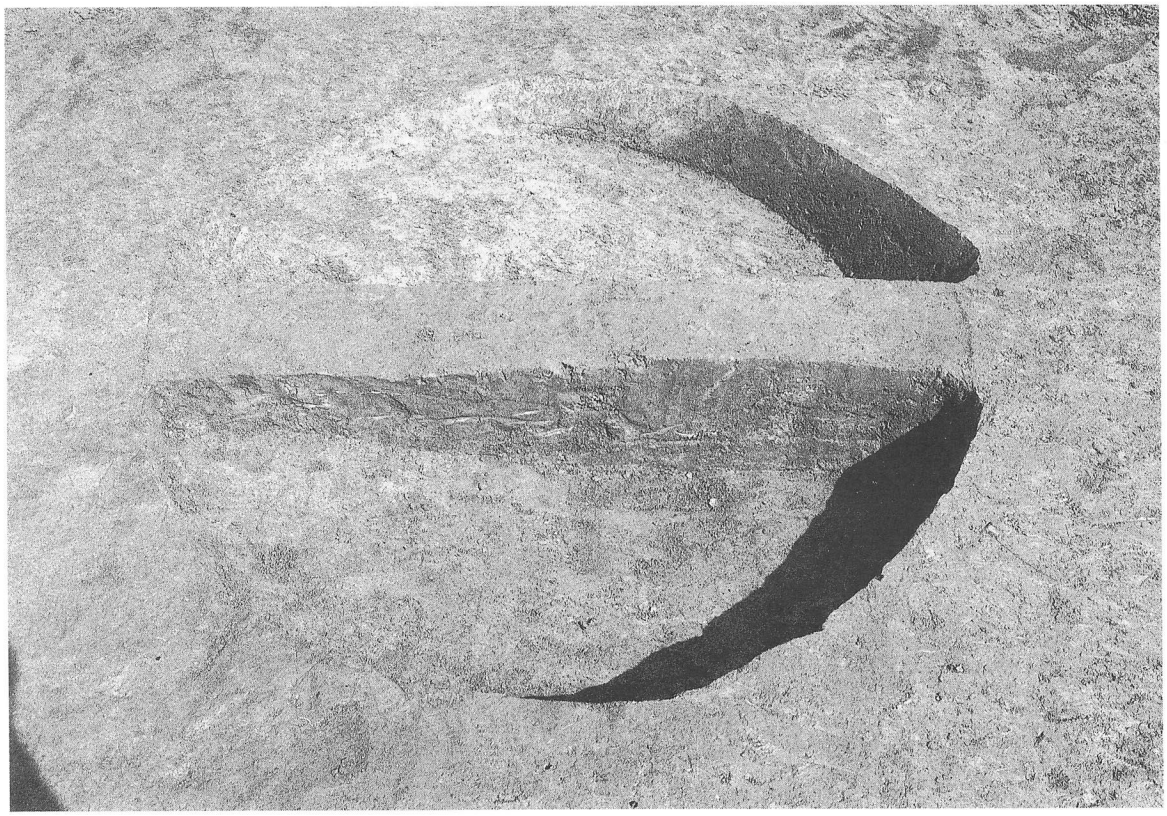


東区西壁（N－S）セクション

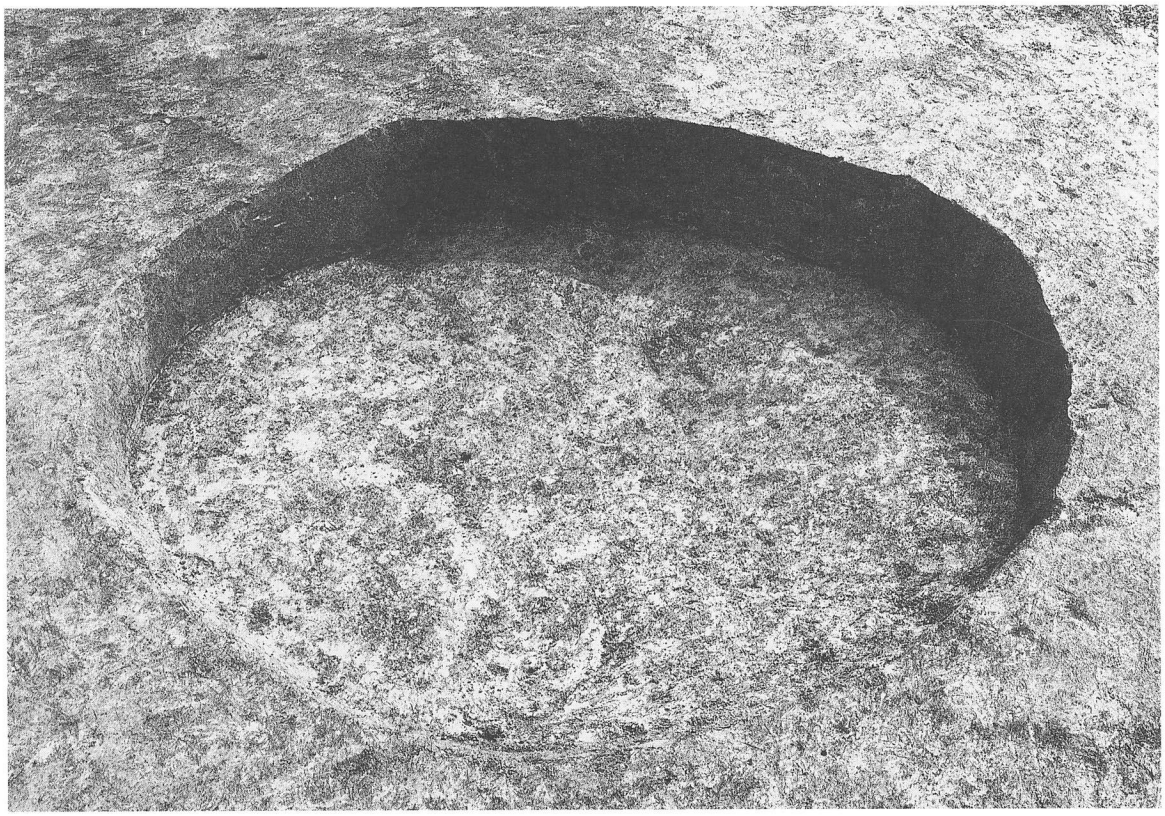


同上

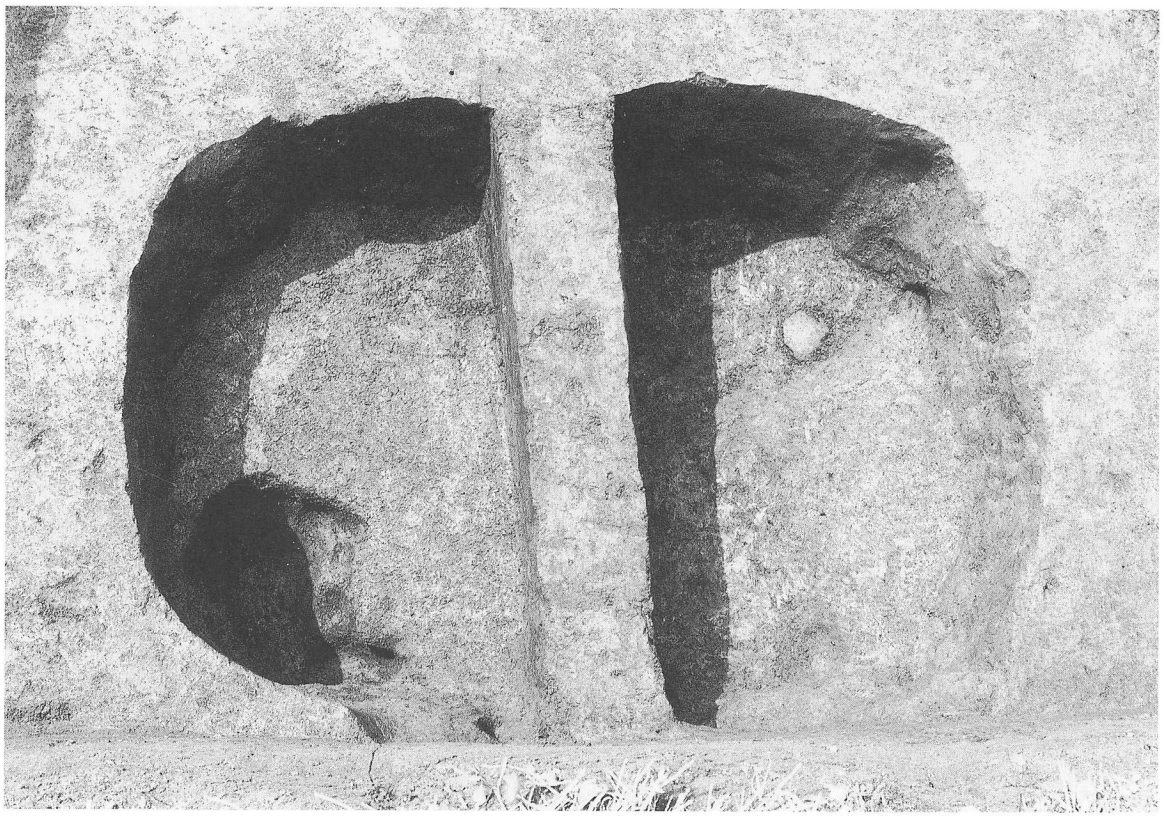
PL 4



SK 1 セクション



SK 1 完掘状況



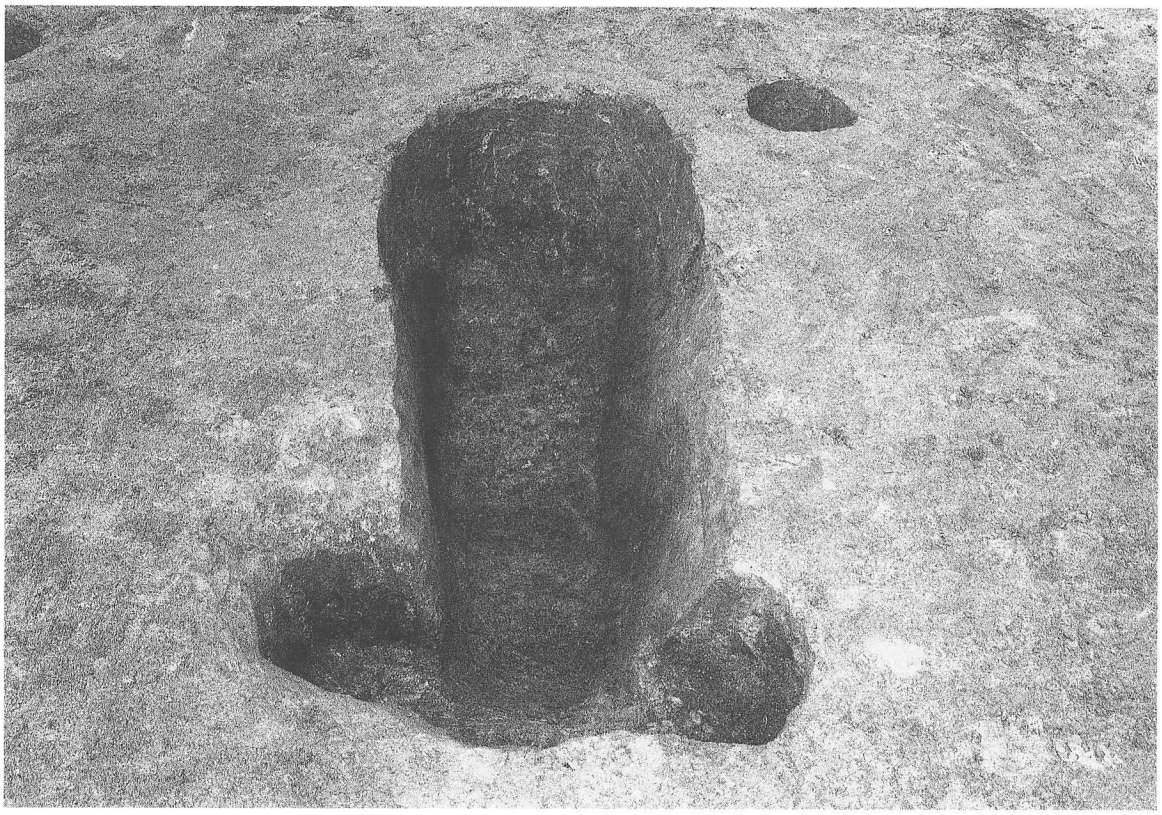
SK 3

SK 4 完掘状況

PL 6

SK 5 半截状況

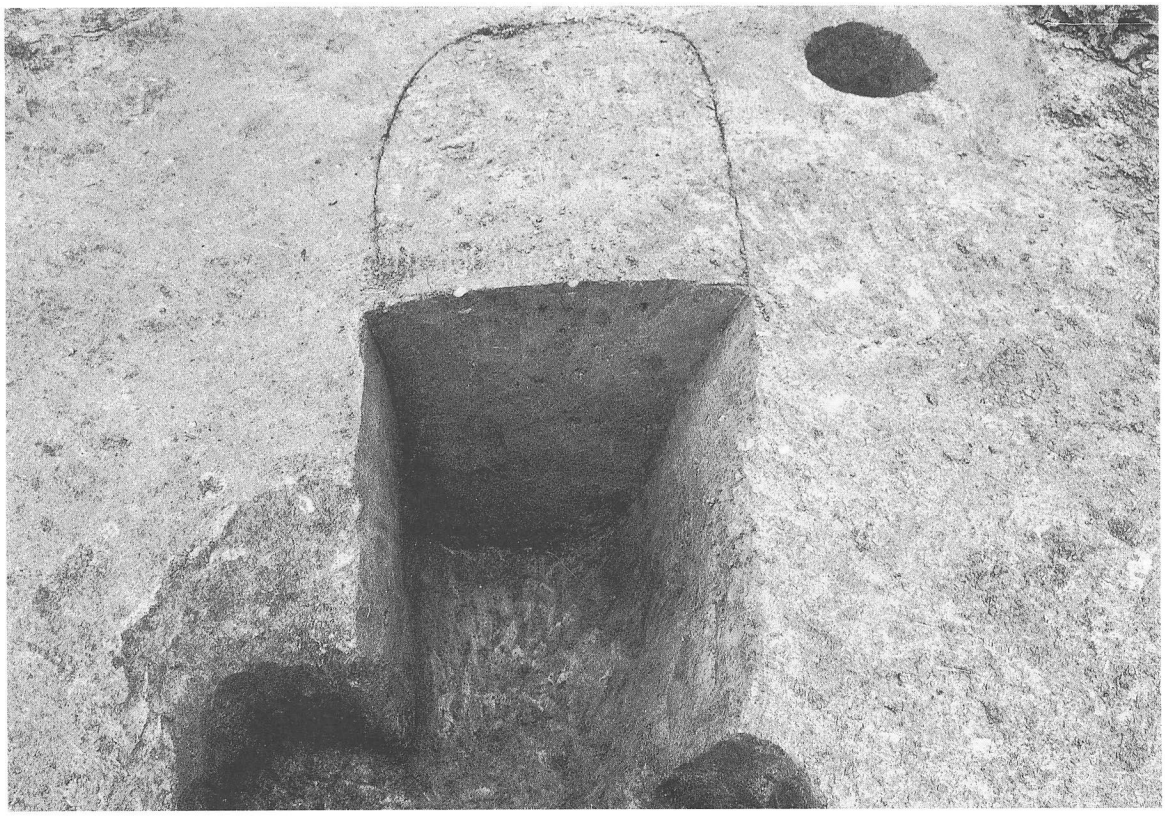
SK 9 完掘状況



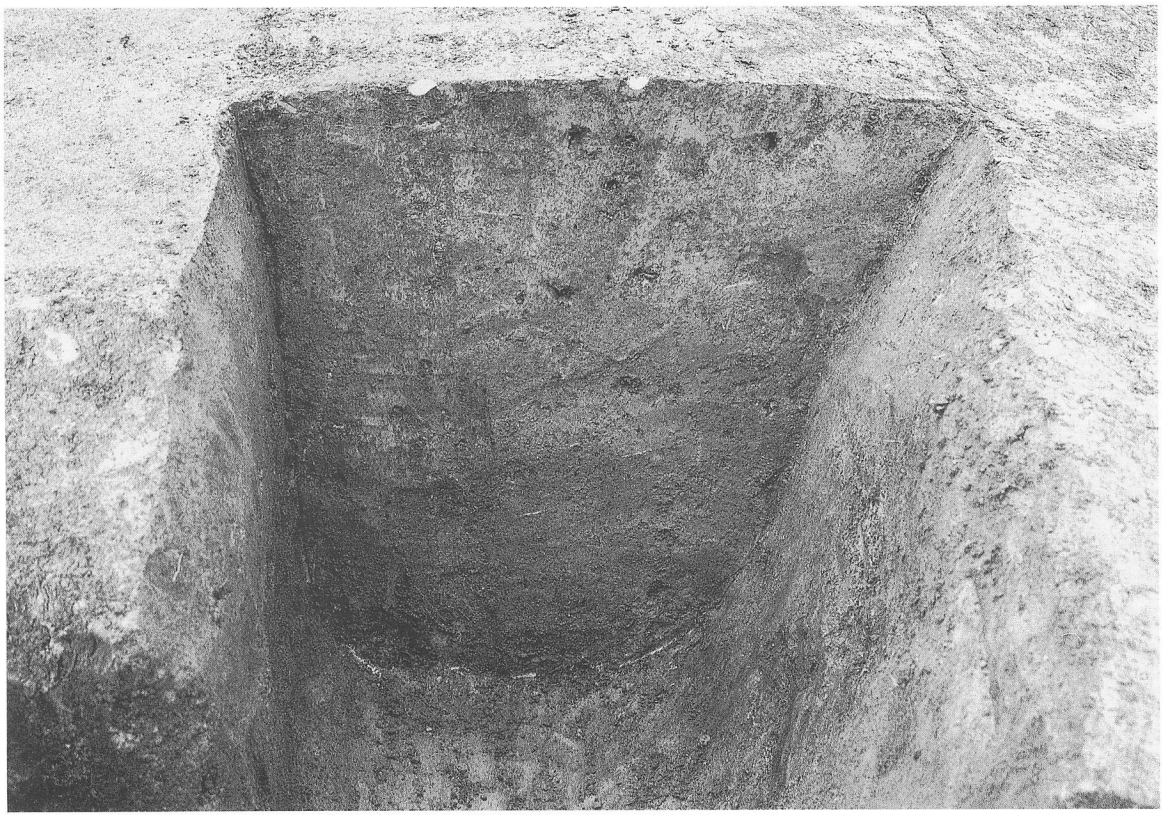
SK 11完掘状況（南から）

同上（東から）

PL 8



SK 11セクション

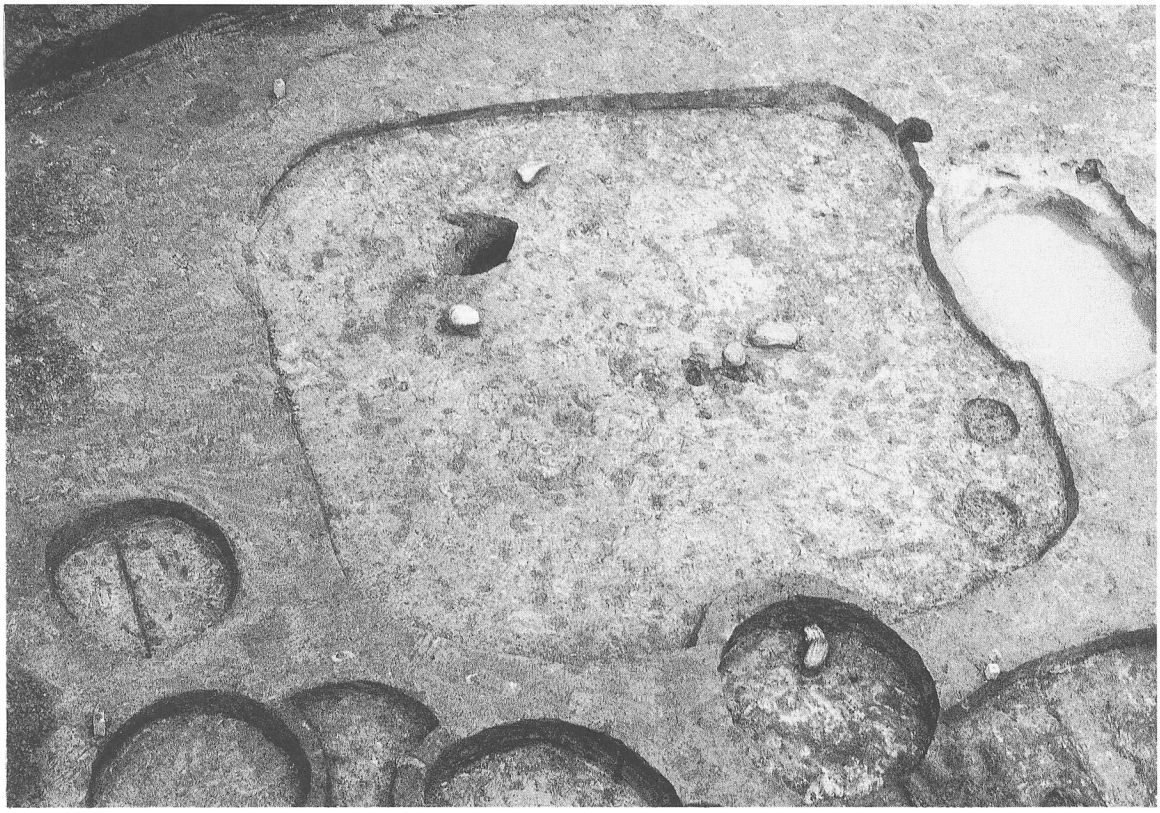


同上

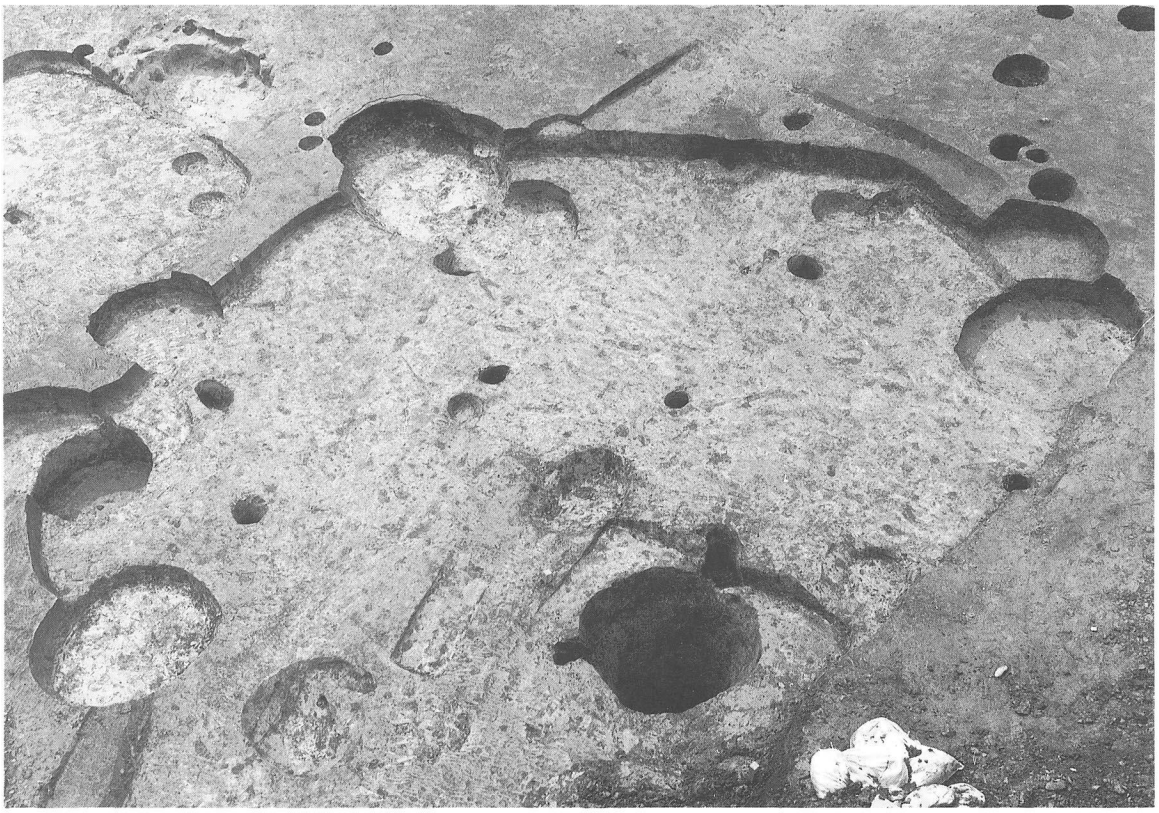
SK 17完掘状況

SK 18半截セクション

PL 10



ST 1 完掘状況



ST 2 完掘状況

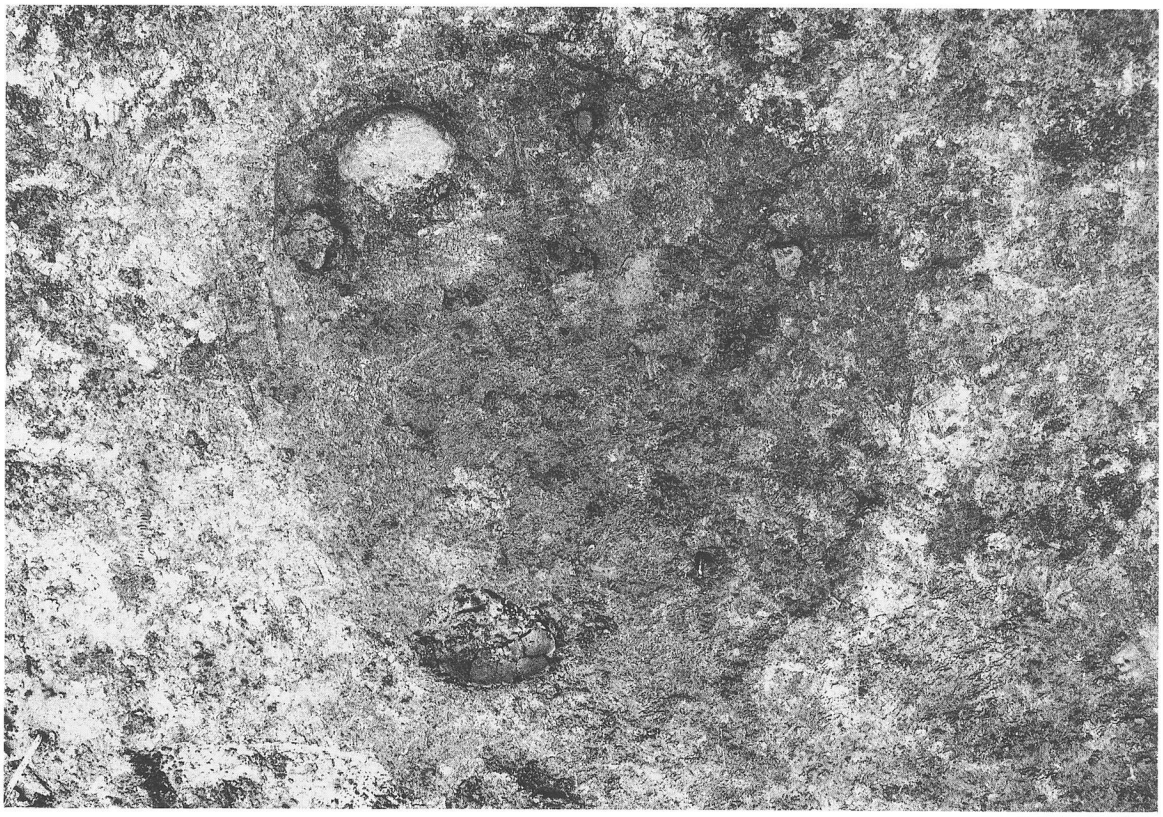
SK 32遺物出土状況（上層）

同上（中層）

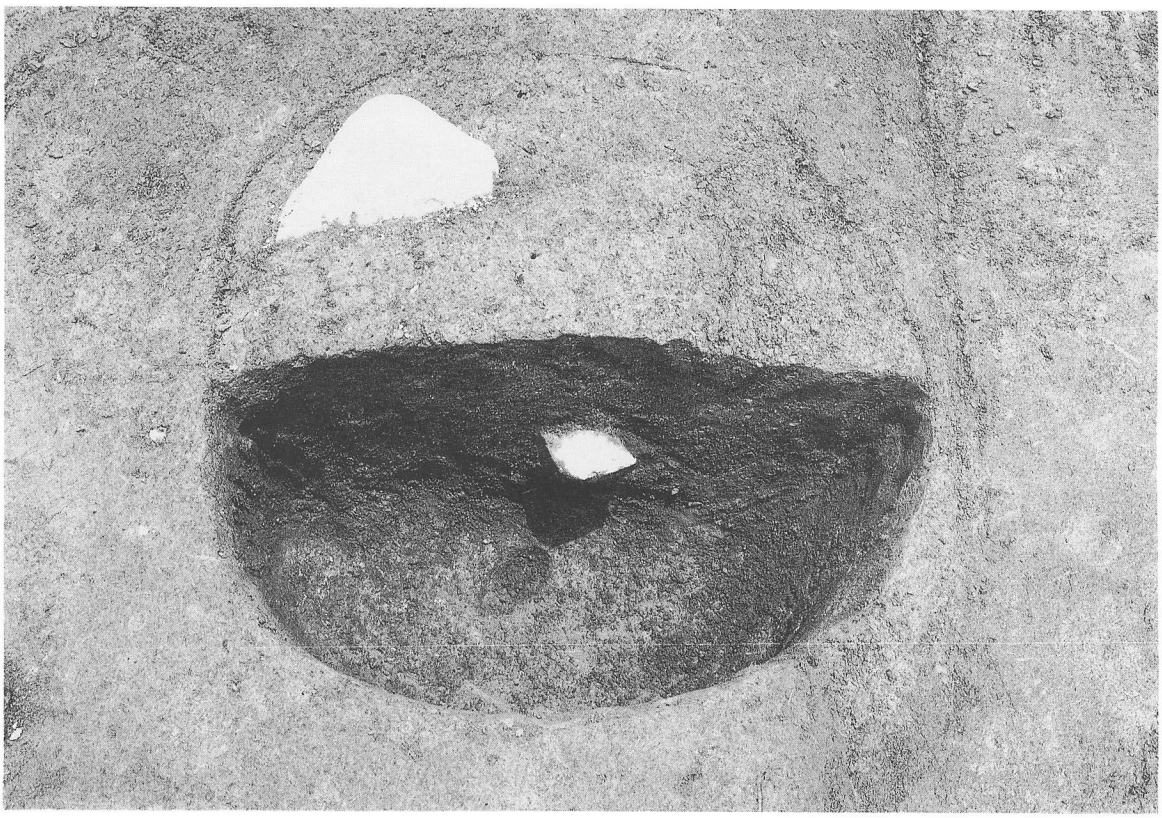
PL 12

SK 32遺物出土状況（中層）

SK 32完掘状況



SK 33検出状況



P 13半截状況